日本本土在沖縄県人の出稼と定住生活の研究

［生活記録編－1］

石　原　昌　家

はじめに

先年『郷友会社会－都市のなかのムラー』（ひるぎ社　1986年）において沖縄県内にある沖縄の同郷人組織体の郷友会について概観してきた。そのとき、県外における沖縄の郷友会・村人会・県人会と県内における県外の郷友会・県人会組織については、後でみていく予定であると述べておいた。そこで、本研究では沖縄県人の日本本土での出稼生活とそこに定住していったもののその過程と生活について記録するとともに、日本本土における沖縄県人の郷友会・村人会・県人会についてその機能と役割について解明していくことを目的としたい。そこでまず、生活記録編で沖縄県人の出稼とその出稼先に定住していった過程と生活を「生活記録の社会学」の視点で記録していき、のちに論述編でそれをとおして同郷人の結合組織についても分析していく形をとっていきたい。

この研究のために1979年２月から現在にかけて、兵庫県、大阪府、京都府、愛知県名古屋、神奈川県、東京都などに居住している沖縄出身者多数から聞き取り調査をすすめてきている。それは生活史調査法（life history survey）によって個々人から丹念に聞き取りして、資料収集していった。したがって、まずは本紀要において数回にわたって生活記録編として個人の生活史を綴っていくことにする。聞き取りした項目は、出稼動機・職業歴・カルチャーショック（言語をはじめとする異文化接触）・県人会（村人会・郷友会）活動・沖縄の伝統文化活動・伝統行事の継承・通婚圏・沖縄県人密集居住地域（いわゆる沖縄ムラ・沖縄部落）の形成・投票行動・二世以降の沖縄県人意識の変容など多岐にわたっている。しかし、聞き取り調査した内容をすべて網羅すると膨大な分量になるので、個々人のそれをできるだけ簡潔に、概観的に記録せざ

るを得なかった。これらの項目は論述編で分析的に記述していくので、本編では個々人の生活記録のなかでアトランダムに述べられるにすぎない。（本編では、筆者が聞き取りした個々人の記録を一人称・〜だった調で記述する）

事例１.

宮城清市氏（明治38年生・羽地村稲嶺出身・1979年大阪市大正区で聴取）

大阪への転出動機

私は男４人、女２人の６人きょうだいの４男として生まれた。異母兄が農学校の校長をしていた宮城鉄夫（明治10年生）で、その兄の元から通学していた。私が沖縄県立第二中学校に在籍していた当時、沖縄県下の中学校では運動会が盛んだった。大正12年に県の運動会が初めて実施された時、私は中学4年だった。それまでも、一中と二中の対抗試合が盛んだった。初の県の運動会は、那覇市の潟原で実施され、二中が優勝した。その翌年、大正13年、県下の陸上競技大会が、潟原で実施され、その時も二中が優勝した。私はその時、ハイジャンプで県のレコードを持っていた。二中から師範学校へ進学して、大正15年に沖縄師範学校を卒業したが、私は相撲・柔道も得意だった。それで、あの当時は運動ができる教員は引っ張りだこで、それで山原に教員に来るようにいわれていた。当時の県視学は島袋源一郎だったので、兄が源一郎と相談した結果、那覇がよいだろうといって、南風原に行かされた。あの頃、南風原には大校長が赴任する場所といわれていた。しかし、自分は他府県の教育を見ておかねばならないという考えを持っていた。狭い沖縄では駄目だから一度飛び出してみないといけない、自分の力でやるんだという気概で源一郎氏に相談した。すると、出向として出ていくかということだった。その場合は２ヵ年で戻ってくるということだった。つまり、研究訓導ということで、帰沖したら、ポーンと月給があがる、という制度があった。退職・休職・研究訓導・出向のいずれかでいくかということだったが、「いや私は、辞めて大阪に行く」と言い張った。

沖縄ではちょうど満１年間勤務した。兄は、明治39年札幌農学校を卒業したので、大阪には先輩・同僚・後輩が沢山いた。それで、紹介状を20枚ほども書いて持たせてくれた。しかし、兄は自分を心配してくれたのだが、自分は自分の力でやるんだと、ひとりで昭和２（1927）年、大阪に乗り込んでいった。

大阪での就職

最初は働きながら大学へ行くつもりだったが、大阪に小学校時代の同期生だった沖縄師範出身で羽地出身の教員がおり、そのひとに「教員しながら通学したほうがよい、まずは教員をしろ」といわれ、そこで受験して合格した。兄の紹介状も出さずに、昭和２年４月５日、大阪市役所へ赴いた。ちょうど、その時西成区の津守小学校の校長が来ていて、自分を知り、「これは珍しいお前を採ってやる、あしたから来い」ということになった。

大阪に着いて西も東も分からず、西成区の津

守がどこにあるかも分からないという時だった。それではと、4月6日そこへ行った。4月2日に大阪に着き、4月6日から教壇に立つことになった。私としては内地にも師範学校は沢山あったが、沖縄師範を出てもナーニ負けるものかという気持ちがあった。校長はすぐに沖縄からぼくの成績証明を取り寄せていた。そこで音楽の成績がよいということで、音楽の主任を3年やらされた。5～6年の音楽三部合唱やら二部合唱やらを指導した。勤務先の津守第三小学校は、現在の北津守小学校の前身である。そこへ15年勤務したので、そろそろ大正区でもつとめてみようと思い、昭和16年4月近くの港南国民学校に転任した。

大阪大正区への出稼ぎ概況

大正中期に大阪へ一時の出稼ぎが多くなり、大正10年から13年にかけて盛んに出てきた。（いま、大正区に沖縄県人が数万人いる。大正区には、沖縄出身の次に鹿児島県人が多い。鶴町には徳島県人、四国・九州人が多い。大正区全体は、結局四国・九州出身が多い。）

出稼ぎのために、自分のムラを離れる場合、友人・知人・親戚を頼ってくるのが常識で、私も大正区にきたのは自分の小学校の恩師がそこにいたからその先生を頼ってきた。

大正区の沖縄県人は製材業で生計をたてていた。大林組の大林製材というのがあり、その職工に沖縄から多数募集されてきた。昭和2年私が上阪した時、盛んにそこへ就職して、そこでウデを磨いていた。

大阪への出稼ぎといっても、現在とは異なり無謀に飛び出してくるので、まず住む家がない。そこで友人の所に駆け込む。するとすぐにそこは一杯になる。そこで庭が3坪位あるのでそこで離れを作ろうともくろんで、製材所から廃材をもらってきて、裏部屋を作って増築していった。そのような形で、沖縄人出稼ぎが増加していった。

大阪での生活態度は知人等を頼って大正区へきて、ちょっと大阪に慣れたら他地域へ移動していく。だから大阪在住沖縄県人は大正区が元祖になる。元をただせば大抵北恩加島ふりだしである。

北恩加島は住宅地帯で借家があり、全般的にはよかったが一部悪い条件のところもあった。例えば、借家の後ろに池があっても、そこに軒をのばして部屋を増やしていくというなどの方法をとっていた。したがって、湿地帯にも沖縄出身の家がどんどん増えていった。沖縄の女性は、私が見てきた所でいうと大変勇敢であった。男女どちらが先に出稼ぎにきたのか分からないが、大正区には三軒屋・福島・鐘紡など沢山の紡績工場があり、これに応募してきたのが沖縄の女工で、相当数来ている。いまの77～78歳（1979年現在）のひとが沢山きている。それに前後して大林組が職工を大募集していた。ひとりが一軒の家を借りたら友人がやってくるのですぐ一杯になり、そこで友人のために離れ家を作ってやったりするので、単身でやってきた者がなかなか大阪は住みよいということで、そこに住み着くようになった。大阪はよく儲かるということになった。大阪ではほとんど借り家住まいだった。当時、大阪へ来て、一儲けしてそれから

外国へ行ってやろうと旅費稼ぎのためにやってきたものも沢山いたが、次第に海外へ行くことも忘れてしまうほどだった。大阪と東京では、沖縄出身の出自が異なる。大阪には沖縄で農業していたものが多い。山原で他人に雇われ、利息のために働かされている人がポーンと飛び出して大阪へ来ている。例えば、20円の利息のために使われているのだから、20円稼いで送金したとかそういう人が後に成功している。半世紀前の沖縄を考えながら、大阪の50年前を考えないといけない。

沖縄県人はよく働いた。それが、現在の状況を作った。昭和15～6年、17～8年頃に一度に100名位応召したときがあった。その時、身体の良いものしか大阪にきていないから、他府県人はびっくりしていた。大和人（他府県人）は三々五々しか集まっていなかった。国の為に尽くすという意味でも、エライもんだと感心させられた。それを契機に沖縄県人が見直されるようになった。

郷友会・県人会の結成について

昭和2年、20歳の時に上阪したのだが、2～3年の間沖縄の人が密集していた大正区に出稼ぎに来ている沖縄県人の現状をみていて、これではいけないと思った。それが、25歳の時に沖縄県人のためにと決意した動機である。まずは自分の村からやれと、昭和5年羽地村人会を結成したが、会員は1000人余もいた。いまでは村人会として約2千人もいる大勢力である。それから、昭和10年にあちこちに小さい会があり、それぞれが自ら県人会と称していたので、それらを結合していく動きが顕著になった。大正区でも会組織が5～6個所もあった。それは大正区を一丸とした県人会組織でないということで県人会としてまとめた。その時30歳だった。沖縄からの出稼者が、酒飲んでブラブラ歩くといった時代もあったが、県人会を中心として沖縄出身者が、生活の向上をはかり、安定していった。北恩加島、南恩加島で県人会を名乗り主導権争いみたいなことをした時期があった。それではバラバラで困るから一つにまとめないと県人の発展はありえないと考えた。沖縄出身者は、銀行取引はエライ人がやるもんだという観念があり、沖縄人の行くところは至る所で模合（頼母子講）が行われていた。

大阪にいる沖縄県人が発展するには、「大阪人になりきれ」というのが私の持論である。ただし沖縄を忘れろという意味ではない。先祖の国として尊重しなければならないが、そうでなければ絶対に成功しない。大正区には、約9万人いるが、それは寄り合い所帯である。自分が大正区の仕事をしても、どこの人間だと聞くものでもない。区長とも昨日（2月20日）一緒に岐阜まで所用で行ったが、自分の生まれは大阪だが父は島根であり、自分はそこのことはなんにも知らないといっている。こうして大阪人となっている。

終戦直後の沖縄県人

戦後初期、大阪市に転入できない時期があった。ただし町内会長の許可のあるもの、海外引揚者はその限りではなかった。私は大正区北恩加島で昭和10年から13年間、30から43歳まで、町内会長をしていた。沖縄人で大阪市

内の町内会長をしているものは私一人しかいなかった。だから、酒の配給から冠婚葬祭にいたるまですべて町内会長の権限にあり、絶対的権威を持っていた。戦後、進駐軍指令によって町内会は解散されたほど大きな力だった。昭和23年そこそこまで町内会はあった。

長崎・京都・和歌山から疎開していた沖縄県人が大阪に転入しようとしても、入れないという時期に、町内会長をしていた私を、県人は大いに利用した。私が北恩加島に転入したということにするが、一日もそこにはいないで、すぐに古巣の他地域に戻っていった。私の許可証はいくらでも発行できたので、現在、大正区北恩加島に羽地出身が多いということは、それが原因かも知れない。しかも、大地主から焼け跡を2600坪も借りた。「一人一人にちょっとずつ土地を貸すのは大変だからあんたとこでひとつなんとかできないか」と依頼されたのである。それで私名義で、県人のために坪20銭で2600坪を9年間も5千円程度で借りることになった。その土地をどうするかと友人に相談したら、大通りは坪50銭位でほかの土地は安くして貸そう、傷痍軍人・遺家族には無料にしよう、私は恩給を貰っていたし、金儲けする必要はなかった。それで沖縄に引き揚げた傷痍軍人で私に感謝しているひとがいる。地代はタダだからどんどん人が集まってきた。そして、沖縄人は勝手に土地に家や掘っ建て小屋を建てていった。自分の知らん人まで勝手に建てていったので、昭和25年位になるともう収拾がつかなくなった。そしたら、昭和29年頃に北恩加島で大火があり、全部焼けてしまった。その時、その場所に対して立ち退き命令がきた。私は、昭和28(1953)年には鶴町にきていた。

その焼け出された人達をどうするかということで、仮設住宅に入れたりしたが、今の平尾町に移そうということになり、その時平尾町に移動した人達は、土地が広くなった。人間の住む土地は与えねばならんということで、私は“ヨッシャーヨッシャー”と全部に証明書を出した。私は今でもその時の領収書をもっている。所帯数何百とあったので、沖縄の人は不法占拠しているんだという噂が出た。それで平尾町で民生委員をしている沖縄の人に会って、「そんなことは絶対にない。私に対しては不法占拠であっても、私は、2600坪確保しているが、それは地主に地代を払っているし、その領収書も持っている。だから警察とその地主と罹災者との三者会談で君から、宮城さんは大地主から借りた領収書を持っているから」とそのことを言わしたら大地主は一言もなく、そのことで不法占拠ではないことが証明されて、12〜13坪の土地を坪2600円で買った。だから、今ではかられらは土地持ちで家も堂々たるものを建築した。ウチナーンチュは、戦前のように裏庭に作るというものではなく、応接間もあり、電話も備えた堂々たるもんで、その発展ぶりはエライものだと思っている。

終戦直後の海外引揚者と県人会

終戦直後、沖縄県人会は沖縄人連盟として泉尾北小学校を借り切っていた。大阪市に学校を借りにいったとき、県人会は幸地長堅氏が会長だった。泉尾中、泉尾北の二つが統合

して一校は廃校になるという情報を得た。泉尾北校が廃校になることになったので、県人のためにそれを借りにいった。すると、役所の施設課長は「そんな学校はどこにもない」と言い、「あるじゃないか」と言っても、「そんなもんはない」と言い張るので、「それでは沖縄県人は海外から引揚者が来るので、各家庭に同居させても満杯である。それだったら市役所へ何千人という人を、全部連れてこようか」と、プレッシャーをかけたらびっくりしていた。すると、援護課長が、「宮城さんあんたそんなこというけど、大阪市への転入は許可されていない」といった。それに対して、「私は町会長だよ。沖縄出身で私一人だよ。町会長の認可を受けた者はその限りにないという書類をあんたは発行しているよ」と反論した。それと海外引揚者は大阪市への転入を認める通知があった。「私の認可を受けて大阪市民になったんだから、市の援護機関であるあなたの所で引取なさい。あした1千4～5百人（それは過大にいったのだが）の人を市役所の廊下に全部座らすよ」といった。

いま思うと、座り込みという強談判は大阪市では、沖縄県人の私らが初めてではないかと思う。切羽詰まったからそう言ったのだが、「いったん市民になった以上は市の責任じゃないか、全部引き取れ、沖縄の責任じゃない」、といったら相手はびっくりした。そしたら「すまんけどあした教育部長に会って話をつけよう」といった。

昭和20年に私は教員生活を辞めていた。

［教育部長との関わり］

昭和19年那覇市が十・十空襲（10月10日米軍機の大空襲）でやられた時、沖縄がやられた以上、私は沖縄県人のためにたたかう（いまから考えたら愛郷心が人一倍強かったみたい）と決意した。大阪市でも戦時疎開が始まっており、私は大正区で民生委員や県人会長をしているから、なるべく残ろうとしていたが、勤務先の学校の教頭が四国に疎開引率していったが、疎開先でちょっと揉め事が起きていた。それで校長に「宮城君きみが行ってくれないと納まらんから、君が行ってくれ」、といわれた。それで県人のみんなに相談したら、「君が県人会を辞めて、疎開したら沖縄県人は闇ではないか、誰が指導するんだ」と、先輩連中がいった。25歳で県人のために命をかけると決意もしていたから、それで、「学校を辞める」といったら、「宮城君辞めんようにしてくれ」、と留められたが、それが教育部長に伝わった。教育部長は市川寛というひとで、私を可愛がってくれた。「宮城君辞めんようにしてくれ、いまはもう戦争だが、4年したら必ず校長にするから辞めんようにしてくれ、きみは有望だから辞めないようにしてくれ」、「いやもう先生ね、沖縄がこうなった以上私は教育者として、もうじっとしておれない、大阪にいる沖縄県人のために働くから、辞めさせてくれ」と頼んで、それでやむなく辞表を受とってくれた。

そのひとが交渉相手の教育部長だった。施設課長を通り越して教育部長との直接対話になった。よっしゃ、これはいいと、教員時代に可愛がられたから、市川先生の所に行った。まず、お礼を言って、「先生、こんどはね、

沖縄の海外引揚者、罹災者を生かすも殺すも、先生の腕一つにあるんです。県人何万人という人が路頭に迷っている。先生に可愛がって貰って、感謝しているが、今度沖縄県人のために先生の腕を発揮して欲しい」と、泣きついた。

そしたら、市川先生は、「きみがそういうんだったらよろしい、あした助役と相談する」（森下助役＝のちに参議院議員）と言われた。そこで、市川先生に連れられて、助役に会ったら、「よし、今日から借りなさい、契約は後でよいからただで借りなさい」といわれた。電話も付いていた。そういう経緯で一つの学校全部を沖縄県人が借り切った。ただということだったが、そうなると、余所からなんか言われるかも知らんから、月1000円は出しましょうということになった。

そこで海外引揚者がどんどん収容され、50所帯ほど入れた。入居する人には、「これは大阪市の学校だよ、市が復興してだんだん子供達が増えたら返さなければならないよ」といった。これは教育部長との約束でもあった。部長に、子供たちが増えてきたら、どうするのかと言われたとき、「先生、私も教育者の端くれです。いつでも返します」と約束した。

運動場の中に新しい校舎が４つあり、それを病院にした。医者が７人位いて、海外から引き揚げてきた沖縄人の医者で新島いわお氏（二中出身）を院長にさせた。病院は５年ほど運営していた。医療器具は、砲兵工廠の陸軍病院から払い下げて貰った。

引揚者の中に二中出身が沢山いたので、私は民生委員もしていたから、「君らは奉仕的にやってくれ」といった。

昭和27年頃になって、次第に児童生徒が増えてきたので、大阪市が返してくれといってきた。当然、了承した。だが、50世帯はどうするかということが難題となった。入居するときに「皆さんは私から借りている。だが市から文句いわれんようにしてくれよ」、とただで貸していたのである。すると、彼らはいろいろ話し合って、立ち退き料を要求するとか、いろいろ問題がおきた。それで、私はこまりはて、その時北恩加島に23坪位の家を作っていたので、そこで皆を集めて、「あんたがたね、沖縄県人の恥になるようなことをしてくれるなよ、市との約束は、子供のためにはいつでも明け渡すという約束でしたよ、しかし、入居させた以上私の責任である。あんたがたは私から借りたから、立ち退き料を請求するなら、私には北恩加島に23坪の家があるので、皆さん方はこれを取りなさい。貰いなさい、それを売ろうがどうしようが勝手にしなさい」、と言い放った。自分の家を放り出すといったものには勝てず、私の勢いに呑まれて皆さんは静まった。

私はその前に区役所に行って、総務課長に沖縄県人はこれだけいるからと、全員市営住宅へ入居できるよう掛け合ってあった。市営住宅は抽選だが、全部を城東区、大正区の市営住宅へ入居させた。役所に申し込ませて、抽選に当たったという形にしかできなかった。

終戦直後の沖縄県人の生活

終戦直後は沖縄県人間に製材業がはやり、大林製材で腕を磨いていた。焼け野原に電気

を引っ張ってきて、ノコを据えたのは、沖縄県人が始まりだった。約40か所もあった。それをどう維持するか、これからがまた問題で、山から木を買ってくるため、それを運ぶ馬力が必要だった。戦時中から馬力持ちの沖縄県人が沢山いたので製材業が沖縄人の仕事・生活の根拠だった。40か所もあったのだから製品は大阪市の復興にどんどん役立っていた。小さい製材所ながら5～6人程度の製材工がいた。材木は近郊の山から採ってきた。大阪市内は焚き物ひとつない時代だから、焚き物も配給だった。製材の切れ端を手頃な大きさに切って、束にして薪として売った。配給の時代だから売りに出たとき、それが闇商売だから 経済違反として次々に捕まり、大問題になったが警察にかけ合って解決した。

戦後の沖縄県人

大正区では、沖縄県人が経済的にも社会的にも大きな地位を占めている。私自身でいっても現在（1979年2月）28の肩書を持っている。50年前日赤・保護司の会長なんていうのは雲の上の存在みたいな時代があった。それがいまでは私がその地位に就くことになった。それまで体協の会長など、昭和初期学校後援会委員でも師範学校出で羽地村出身の宮城源清さん一人しかいなかった。50年前と雲泥の差がある。50年前だったら沖縄から来た人は何も分からん人が多かった。バカにされて、それを差別というが、私はあながち差別とは思わない。例えば、壱岐対馬・天草などからきている人達も沢山いる。やっぱし、彼らは田舎もんといわれるし、ましてやさらに遠い沖縄から来た人を田舎もんとバカにする人は当然いる。私は教員しているとき、小学校の4年の生徒だったが、沖縄の子供が転校してきた。教頭が「宮城さん普通語しゃべるかな」と聞いたので「沖縄の子供はかえってここの子供より普通語はウマイ」とやり返したことがある。だから、50年前ここの人が沖縄を知らなくてもそれは当然で、沖縄の百姓がそのとき「佐渡」について全く知らないのと、それは同じことである。

現在の沖縄県人

沖縄県人の良いところは、自分が働いて立っていくので国からの補助金を貰いたがらないことである。私は昭和20年から鶴町に来るまで民生委員・保護司をやっているが、県人は他府県人よりも生活保護を受ける率は低い。県人では数万人もいて民生委員をしているのは私一人だった。だから、困っている人に勧めても自分でやる、ひとのやっかいにならない、しかも、国のやっかいにならない、大阪まできてそんな風になると沖縄の恥だ、村に対しても恥だと、だから大阪の沖縄県人は惨めな事ばかり考えずに前進しようというのがあった。大正区は、沖縄の縮図である。現在、大正区では経済的にも沖縄県人は上位の部分にいるのではないか。県人で土地を持ち、自分の家を持っているのは500軒から600軒ある。借り家住まいは少ない。県人で電話のない家はないでしょう。

大正区の県人会長を24年間やっている。昭和36年から会長を譲った。連合会長も26年間やった。こんど交代してくれといっている。

郷土の村人会、字単位になると郷友会だが、その数は少ない。大阪在住県人会は、沖縄に一億円を越す寄付をしている。羽地、稲嶺、真喜屋、源河小学校や中学校へ全部に150万円の寄付をしている。体育館、図書館の経費、各字公民館建設、育英資金などに寄付してきた。育英資金だけでも、1000ドルやった。琉大にも島袋学長時代500ドル寄付した。

大阪沖縄県人会館

その会館は、大阪府民のため青少年・身体障害者・傷痍軍人・老人クラブに使用料を四分の一にしている。市の施設はこのように安くはしない。県人会館だけである。だから傷痍軍人会はよく利用している。沖縄会館建設の際、大阪府、大阪市が各4千万円助成してくれた。これはいかに大阪で沖縄人が信用されているかを物語っている。沖縄県人が大阪府・市のためにいかにやったか、その4千万円を助成してくれたことにも示されている。いままで、市長・助役・知事と親しくしているが、他の県人会に助成している例はない。沖縄会館は自分が政党人だったら建設できなかったと思う。県人会は政党人だったらだめである。自分に区会議員、市会議員になってくれという勧誘は何度もあった。選挙に勝とうと思ったら政党人でなければいけない。無所属では勝てない。県人会は、会員の普段の思想・信条は自由でなければならない。大阪の県人会が今日まで連綿と続いたのは、ここにその根拠があったのではないだろうか。自分は超党派である。自分には2～3の政党から公認候補として立候補しないかと誘われていた。府も市も4千万円の助成ともなれば、議会の了解を得なければならない。私が議員になっていたら、助成金を得ることは出来なかった。自民党から立候補することになるから、おそらく立候補していたら助成金は貰えなかったでしょう。他党が反対するはずだから。全党がＯＫしてくれた。結局1億3千5百万円で作った。沖縄から一銭の助成もない。「沖縄県当局から貰ったらどうか」というひともいるが、「それはいけない」といった。戦後沖縄のためには我々は金を送ってきたが、それをくれといったら、我々が沖縄に助成してきたものが、徒花になる、駄目になる、それで我々の力で作ろうということになった。県人会館の土地は、松岡政府時代に200坪2千万円（利息分90万円）で土地を琉球政府が作ってくれたので、現在は沖縄県からの借地ということになっている。

事例2.

岸本恵徳氏（明治31年生・本部町伊野波大道出身・1979年兵庫県尼崎市戸の内で聴取）

結婚後に出稼

私は、兄弟姉妹6人の上から3番目の長男で、結婚して既に子供もいたが、大正10年、23歳の時に単身で関西へ出稼ぎにでた。農業では生活が苦しかったので、弟がすでに大阪平野の日本紡績で働いていたから、彼を頼ってその紡績に勤めることにした。賃金は日給で1円5～10銭だった。当時沖縄人が20～30人程度働いていたが、中頭出身者が多かっ

た。弟と社宅で一緒に寝起きして、食券を求めて紡績内で食事はすませていた。1年半後に北恩加島の関西製材に転職してから沖縄から妻子を呼び寄せた。製材所では、材木担いで船積みしたり、材木の寸法を測って並べていき、検査をうけた後それを受領するなどの仕事内容だった。最初の2か年は担ぎの仕事から始まり、数年すると楽な仕事に回されていった。ここでは、日給1円70銭からスタートして、14〜15年ほど勤めたが、2円20銭まで昇給していた。関西製材所には、和歌山や九州の人達を含めて34〜35人の従業員がいたが、そのうち20名ほどが沖縄出身だった。

私は、沖縄で空手を習っていたので、腕力には自信があり、屁理屈をこねるものには腕力を振るってきた。それで、製材所に沖縄から採用されたばかりの新米がヤマトゥ（他府県人）に意地悪されるのを見つけたら、腕力をふるってやっつけるということが何度もあった。

雨降りなどで作業が出来ないときは、角力をとったりしたものである。そのとき賭をするときもあったので真剣だった。製材所勤務の時の住まいは、大正区の鶴見橋通り7丁目で、借家で大家は大阪人だった。家賃は、二階家で18円だった。そこで下宿も始めた。下宿人を5〜6人から10人ほどもおいた。三食賄い付きで18円とっていた。

一度職場で足を怪我して2か月も入院したが、治らないので足を切断することになった。足は真っ黒になって腫れ上がっていた。しかし、周囲の反対を押し切って無理に退院して、家で妻が沖縄で見たことのある針治療をしたら、熱も下がりはじめ1か月で完治した。いまもその時の傷痕は残っている。切断しようとした医者が珍しがって、使いのものを寄越して経過を調べていた。足が治ったのでまた元の会社に復帰した。

尼崎戸の内での養豚業

その後、兵庫県尼崎市の戸の内に引っ越した。ここで養豚業を営めば儲かるだろうというのがその動機だった。ここへ引っ越すときは、自己資金はなく、友人からの借金と模合で100円こしらえて、二階建てのバラックを自分で建てて豚を2〜3頭飼育しはじめた。周辺の食堂から残飯を集めて飼料にして、3〜4年では100頭まで繁殖させた。牛、豚、山羊、羊まで飼育していたので、それらを仕入れるために九州全域から名古屋、伊豆大島までも回った。羊も長い間飼育して毛を刈っていた。150坪の面積に、ある時豚100頭、牛2頭、羊2頭、山羊を貸車1台分100頭も長野県、名古屋市方面から仕入れてきた。オカラを飼料にしていたが、3〜4人も雇ってその世話をさせていた。これらの家畜は、仲買人として扱っていたので、例えば近くのモスリン紡績会社に羊を相当数納めた。私は、子供が10人もできたので、沖縄から両親も呼び寄せて暮していた。昭和13年、40歳位には30万円という大金を貯金していたので、若い衆を得意先に行かせてのんびり過ごしていた。戦時中私は、兵庫県の養豚組合長もしていたので、各地に友人が沢山おり、兵庫県三田の友人の所に疎開することにした。その頃には、私の子供はすでに結婚もしていたので、婿や親戚などを

含めると35〜6人という大所帯で疎開生活を送った。

終戦直後の戸の内での生活と県人会館

戦前初期、戸の内方面は私ら4〜5所帯だった。しかし、大阪大正区恩加島の海岸近くで炭焼きをしていた沖縄県人が、その煙を周辺のひとに嫌がられ、そこでは焼くことが出来なくなり、一度に約30所帯全員が戸の内に引っ越してきた。それで私は、彼らが炭焼きのために建てた家付近までは、電気が引かれていなかったので、電気を引いてやった。神崎川のほとりで炭焼き小屋を建てて、大阪市内で販売するためマッチでも火が付くカラケシ（消し炭）作りやタドンなどを作っていた。それで私は、終戦後廃船を購入して、船体の上部は薪用に、水に浸かっている部分を乾燥させてから炭にしていった。廃船だからただ同様な値段で購入できた。

戸の内には、そこに在住している県人が土地を700坪余も購入して、建物を建て、大きな財産を所有している。一階はアパートとして貸家にしたり、池原師匠が沖縄舞踊研究所を開設したりしている。二階では、県人が会合したり、踊りや芝居などをして利用している。

事例3.

仲村源栄氏（明治43年生・今帰仁村崎山出身・1979年大阪市吹田市尺谷で聴取）

出稼の経緯

男3人、女3人のきょうだいで三男として育ったが、兄の家族も同居していたので10人家族という所帯だった。父は大正14年に亡くなったので母が苦労した。農地は2千坪ほどしか所有していなかったので、サトウキビと野菜を植えていた。今帰仁尋常高等小学校へ大正6年に入学して大正13年に卒業した。当時は、学校を卒業と同時に関西やハワイなどへ出稼ぎ・移民するのが普通だった。しかし、その頃はアメリカ移民が入植禁止になっていた。南米移民は自由だったが、旅費は150円ほどの大金がかかり、金稼ぎの移民も金がないと出来なかった。だが、関西出稼ぎの場合は、10円ほどあれば行けた。

日露戦争以後、紡績業界が盛んになったので紡績工の募集を各会社が行い、相次いで出稼ぎに出ていった。私は、昭和5年4月にでかけたが、当時は大変な不景気だった。先輩達が大勢いたので簡単に行くのはいけたが、仕事が見つからなかった。幸い長男兄が大正12年に大阪へ来て、生活の基盤を築いていたので半年ほど食べることや遊ぶのに不自由はしなかった。私が上阪した頃は、中小企業がどんどん倒産して、紡績工場も閉鎖していったので、沖縄からの出稼ぎ者が相次いで帰郷していった。私は母1人で農業していたので、21歳まで家で農業手伝いしていたが、友人らはどんどん出ていくので兄が呼び寄せたのである。

最初の仕事と娯楽

半年後に西淀川区海老江・野田阪神近くで米屋の仕事が見つかった。この菱平米穀店に昭和5年10月から昭和9年まで住み込み店員をすることになった。私が職探しをしているときの昭和5年ですら「職工募集ただし朝鮮人琉球人おことわり」という貼り紙を実際みたことがあった。沖縄からの出稼者で、当時は永住を考えるものはいない状況で、みんな一時的な出稼ぎだった。

私は自転車に乗って、仕事探しで方々を回っていたら米屋の店員募集の貼り紙をみつけたので、採用を頼んだ。すると、兄が大阪にいるのなら一緒に晩に来るようにいわれた。当時は、住み込み三食付きで8円という条件だった。そこで採用されたが、大阪弁がとくに電話では通じなく、仕事に支障をきたすということで3日目には店主に辞めてくれといわれた。電話口にでるのが一番怖かった。大阪弁で早口で喋られるとなんにも分からないのに、ただハイハイと空返事して、一向に理解していないことがあった。しかし、もうすこし様子を見てほしいと頼んだら、「もうちょっと居てみい」ということになった。すると、言葉には次第に慣れていき、4か月目位になると、もうその米屋ではなくてはならない存在となった。正月には、鯛の尾かしら付きが出されたので、早速箸をつけようとしたら、それは正月三日目に食べるものだと笑われたりした。だが、一生懸命働くので、主人から大事にされて、店を全部まかされるようになった。奥さんは厳しいひとだったので女中が長続きせず、私がご飯を炊いたり、オシメ洗いまでやって女中兼務したので、信用が厚くなったのである。当時は、朝鮮米が玄米で入荷するのを精米していた。2斗入れの米俵を2つも自転車で運搬した。野里や土佐掘り辺りまで運搬するので、その帰り道あっちこっち寄り道するのが楽しみだった。往復40分位の場所だったが、遊郭の松島方面まで足を伸ばして、看板などをみてまわって3時間もかかる時があった。使用人は私一人だったが、信用を得ているので文句を言われることはなかった。たまに主人が、映画に連れていくこともあった。また、奥さんの実家が伊丹だったので、その使いで伊丹に行かされる時は、伊丹の製糸会社で働いている許婚の所に寄って、翌日帰っても良いと都合をつけてくれる時が週に1～2回もあった。そういうときは、許婚は友人ら6名一緒に間借りしているので、みんなと一緒に遊んだ。妻の伊丹時代は、女子の間借り先には、遠方からでも男性たちが良く遊びにきた。部屋は二階だから竿を立ててスルスルとよじのぼって、コンコンと窓を叩いて開けさせ、部屋にあがっておしゃべりを楽しんだ。許婚を始め女性達は和裁を習ったり、映画を観たりして余暇を楽しんでいた。出稼ぎ男性達の楽しみとしては、芝居見物や沖縄三線と爪弾く以外に、沖縄角力大会なども催していた。現在の戸

の内会館の場所や四貫島でも沖縄県人達の角力大会を催していたが、市岡の運動場や西成区方面で行われ、私は二回三役になり、よく出場を止められた。

病気と模合

私が住み込み店員している時に、盲腸炎から腹膜炎を併発して入院した。そのとき、昭和4年に出稼ぎにきいてた許婚の現在の妻がつきっきりで面倒をみてくれた。それで、退院後の昭和9年に結婚した。私が病気で入院したのは昭和9年のことで、当時としてはとてつもない大金の1000円も医療費として使ってしまった。毎月8円貯めて、300円の貯金はあつた。入院費用は、1日1円50銭だったが、大量のガーゼが必要だった。すでに兄二人も関西で出稼ぎ生活を送っていたので、いろいろ質に入れたり、崎山会で模合をおこして300円こしらえてくれた。最初は十三病院に入院したが、そこでは見放されてしまい、どうしても助けたいなら大阪帝国大学病院に転院するようにいわれた。兄二人が弟を是が非でも助けたい一心で金策に駆け回ったうえに、転院手続きをとった。担架に乗せられたうえに救急車で大阪大学病院に移された。そこで早速小沢外科医の執刀で手術が行われた。しかし、開腹したらもう手遅れだということで、縫合もせずに放置されてしまった。そして毎日入院患者が死んでしまう本館下の病室に移された。そこに移されたら次は葬式の準備をしなくてはいけないという場所だった。

私はもう医師にも見放され、手術した当日からなんでも好きなものを食べて良いと言われた。それで寿司を食べたり、サイダーを飲んだりしていた。崎山出身のものはいつ葬式に呼ばれるかと待機していたということで、当時は崎山出身者でこのことを知らないものはいないほどである。さて、翌日に大勢を引き連れた教授の「御回診」があり、私の病状をみた教授が、これはひょっとすると持ち直す可能性があるということで、入院室をあてがわれ、それから食事制限が始まった。

（当時の許婚・妻→腹は開けたままだったので膿がどんどん出ていた。私は21歳なのでこれからという時だったから、困ったなと思った。3回も手術して5か月も入院したので仕事も辞めて看病につきっきりだった。病室が多くて覚えるのが大変だった。医師の指示でスープ作りをした）。

借金返済のために転職

昭和9年1月9日から入院して退院したのが7月だった。入院費用の工面のために兄が作った模合金の返済のためには、米屋の給料では到底無理だったので、犬井製糸に転職した。1円40銭からスタートして月45円の収入だった。妻は、17歳から紡績会社で出稼生活を送っていたので私の看病のために辞める直前には1円10銭の賃金だったのに再就職のために働

きだした犬井製糸では１日70銭から出直しになった。（大正２年生の妻の体験－17歳に出稼ぎにきた。最初は三国紡績会社に勤務したが、そこでは午前４時半には起こされ、ラジオ体操して午前6時前には朝食をとり、12時間勤務だった。その後転職した伊丹製糸では、朝７時から午後５時までの勤務だった。三国紡績では、一部屋10人位の寮生活を送っていた。門限もあったがみんな若かったので西成区方面の沖縄青年達と付き合って、そのまま一緒になって寮に戻ってこない女工たちもたくさんいた。寮では、他府県の女工達とも同室だった。彼女らは親元から何か食べ物を送られたら、布団の中に隠してこっそり食べていたが、沖縄女工たちは彼女達にも分けてあげていたので、しまいには彼女達も分けてくれるようになった。伊丹製糸では、所帯持ちの沖縄県人の二階を友人６人で６畳２間を間借りした。そこにも寮はあったが、門限が厳しいのでみんな寮生活を嫌がっていた。）

私は沖縄にいる時から、沖縄角力で名を成しており、体力に特別自信があったので、病み上がりでも仕事が出来た。当時は、欠勤者がいたら「おりどおし」といって、勤務を終えても、さらに引き続き働くことができた。それを月に５～６回もやったので月の収入が60円にもなった。つまり、１ヵ月で40日分の給料だった。ビーターといって溶けるまでに３時間もかかるので次を仕込んでいくまでには余裕があった。だから、仕事場によっては仮眠がとれたので、24時間勤務を終えて、川で鮒つりをしたものである。

今帰仁村崎山会の結成

私は、米屋の住み込み店員となり、結婚するまでの間でも今帰仁村内の郷友会である崎山会と関わりをもっていた。崎山の郷友会はすでに大正12（1923）年に結成されていたようだ。吹田のアサヒビール会社に崎山出身者が先駆者を追って相次いで就職していった。そこで言葉を始め非常に苦労したということで、ここで他府県人と伍して行くには団結しないといけないという愛郷心にもとづいて崎山同志会を結成した。そのあと、吹田地区のみだった会員が、昭和３年には関西一円に広がっていったので、会の名称を崎山共済会に改称した。各地に会計もおいて毎月30銭の会費も徴収していた。しかし、毎月の会費徴収は非常に負担になったので、毎年１月３日の新年会に年会費を徴収することになった。当時の崎山共済会の会旗は現在も残っているが、改めて昭和５年に崎山会として出発することになった。当時の会員は約80名であった。昭和６年１月１日、崎山会は大阪府吹田市の吹田川方面の大城幸松宅で初会合をもった。当時は、各人の家を持ち回りにして約80～100名近い会員が集まった。しかし会員が西成区に集中していったので、西成区今宮の寺を借りて会合を持った。

戦前、崎山会の存在を強くアピールしたのは葬式だった。三津屋紡績で会員の紡績女工が肺を患って亡くなってしまった。そのとき崎山会として会社側に葬式を出したいと申し入れして、会旗を揚げて野辺送りをした。その時会社から随分感謝された。会員の葬式は現在でも会としてやっている。当時亡くなっ

たら、遺骨は故郷に持ちかえった。私の昭和15年生まれの長男をジフテリアで亡くした時、遺骨は簡閲点呼で帰郷することになった長兄に持たせた。

当時は、1月3日の会合以外には、大阪の千里山、京都の嵐山方面にピクニックに出かけたり、結婚式などお祝い事も行ってきたが、現在は個人的お祝い事は廃止している。崎山会の特徴は、組織はあっても会則はないということである。会則に縛られずに「わが心を会則として」おり、ひとつのムラみたいなもので、そこにいいところがあると言われている。戦後1970年頃には崎山会の婦人部・青年部も結成してそこが中心になって毎年スポーツ大会を開催して二世、三世が一世の郷里に関心をもつようにしている。現在は、尼崎市の戸の内が崎山会の中心地になっており会館も所有しているので、会合などはそこで行うようになっている。

戦中・戦後生活

私は、昭和18年に召集されて、台湾の部隊に配属され終戦まで台湾の新竹で兵隊生活を送っていた。留守を預る妻は、終戦後夫と再会するまでは、闇商売などで食いつないできた。その頃は箕面市に住んでいたので、子供を背負って闇肉購入のため、「よんこうば」(俗称・現在宝塚市高松町・美幸町一帯)までよくでかけた。そこは沖縄県人が養鶏や養豚業を営んでいたので、闇肉やメリケン粉などを入手できた。田舎で米を入手するときは、油などを持っていき物々交換して食糧難の時代を切り抜けていった。

戦後は、台湾から沖縄へ引き揚げないで妻子のいる大阪へ向かった。そこで再会した後、昭和21年に大阪府が摂津の別府でほとんどただ同様に田圃を与えて稲を供出させる方針をとっていることを知り、そこで田圃6反与えられ、最初は4〜5俵ずつ供出していた。そのうち6反(1反=300坪)を、1反=1000円で大阪府から払い下げて貰った。昭和28(1953)年まで米作りをしていたが、田圃仕事をやっていたら戦前大手術した痕が痛くなったので、水仕事は出来ないということで、その土地を切り売りをして、東淀川で坪300円の土地を50坪購入してアパート経営を始めた。アパートは4畳半で5千円だった。10部屋だったが、夜逃げするひともいた。その傍ら、豚80頭を飼育したりしたが、伝染病で失敗したり、乾物屋やうどん屋もやったが、集金できずに掛け倒れになったりした。いずれにしても、大阪府から安く払い下げてもらった土地をもとにして戦後生活は切り開いてきた。そして、現在の居住地の吹田市尺谷には1968年に坪5万円で80坪購入して引っ越してきた。そして、出稼ぎに出る前、今帰仁村で覚えた三線の技術を生かして、琉球古典音楽の師匠として各地で教習してきている。

事例4.

金城金一氏(大正1年生・今帰仁今泊出身・1979年大阪市西成区で聴取)

上阪までの経緯

私の生まれた部落は、今帰仁村の今帰仁と親泊の集落が合併して今泊と称している。合

併以前でも行政は別であっても、青年団や消防団は一つで、祭祀も一緒に行っている。明治36年に合併したが、3年後の39年にはまた分かれた。それが戦後昭和47（1972）年にまた合併した。郷里では行政上は別であっても、大阪では最初から一緒で郷友会を結成してきた。私は、昭和4（1920）年に出稼ぎのため大阪へ渡ってきたが、きょうだい5名のうち兄や姉4人ともみんな大阪へ出稼ぎに出ていたので、末っ子の私と両親の3名家族で生活していた。私は、今帰仁村で代用教員をしていたので、進学したかったが、経済的事情によって断念させられた。それでユンセー（結＝イーマール・協同労働慣行）によって、友人5名でサトウキビ作りをして、一人当たり黒砂糖2梃（1梃＝10円）の収穫をあげた。それで10円は家に入れて、10円で大阪への船賃にした。10銭、15銭の餞別を貰えたので船賃10円4銭以外に小遣い銭も残った。儲かるまでは、石にかじりついてでも帰らない覚悟だった。すでに、兄は募集人に引きつれられて九州で線路工夫をしていたが、彼らが大阪へ移ってきていたので、私は、18歳の時に兄らを頼ってそこへ来たのである。

職業歴と郷友会との関わり

私の最初の仕事は、屋根瓦には土を必要とするので、鉄砲担ぎという土運び作業だった。屋根に梯子をかけてその土を運ぶのである。当時、大正区は製材関係、西成区は馬力関係が多かった。また、木津川では石炭仲士の仕事があった。当時の仕事は、紡績工場、自転車屋、鉄工所の見習い工などが多かった。鉄砲担ぎは日給70銭だったが、石炭仲士は1円だった。出稼者は、職人になって技術を覚えるという気持ちは毛頭なく、ただ儲けて帰るという気持ちだった。だからちょっとでも多く稼いだら一日でも早くクニに帰ると考えていた。「ヤマトに行ったら手紙よりも、先に金（ジン）を送れ」と言われていた。今帰仁村今泊出身者は、全部西成区に集中して居住していた。

大阪では、兄は石大工で、西成区の梅道に住んでいた。兄は日給1円20〜30銭だった。私は毎月家に送金していたが、兄、姉は所帯を持っていたので、送金はできなかった。そこで、私は姉が勤めていた常盤電気で日給70銭で勤めることにした。常盤電気では、ソケット作り専門で、同級生二が人勤めていた。今泊の郷友会の青年部が組織されていたので、弁論大会や野球部に加わって楽しんでいた。一年ほど常盤電気に勤めた後に、オリエンタル電気に転職して日給1円で勤務することにした。そこでは外交や組立工をやった。オリエンタル時代には、今泊共済会の新年会や春の運動会などに参加した。青年だから一生懸命手伝った。模合は先輩たちがやっていて、青年たちはそれに加わっていなかった。当時の家の広さは、6畳、4.5畳、3畳（炊事場1畳分）が標準だった。三食付きの下宿の場合、兄に対しても10円を支払い、その後15円払っていた。

那覇での出稼生活と大阪への再出稼

昭和7年に徴兵検査をうけたが、私は脚気に罹ってしまい、転地療養のために郷里へ帰

省することにした。そこで那覇市通堂にカネ元商会という米穀・砂糖を扱っていた卸商に勤めることにした。しかし、オリエンタル電気からは戻ってくるようにとたびたび旅費を送金してきたが、私は那覇が気に入ったので、身体の調子が悪いからと返金した。昭和9年には同郷のものと結婚した。私は、12〜13名の従業員の責任者をしており、信用されて月20円もらっていた。那覇には昭和13年までいた。カネ元では沖縄中の産業組合から集金する仕事だった。名護まで会社が自動車を出してくれた。国頭、今帰仁、金武方面にも集金に回った。当時200円、300円もの大金を扱っていた。石川辺りで日が暮れると旅館に宿泊した。二中前（現在の那覇高校の前）の一軒家（6・4畳半）を借りていたが、月6円の家賃だった。カネ元で仕事している内に、間もなく独立して単独で大阪で品物を仕入れにでた。すると大阪の方が物価が高いことがわかった。そして支那事変（日華事変）後どんどん景気に陰りが見えてきた。それでこれは一大事と思い、昭和13年（1935）年の暮れには再度関西に渡り、尼崎の軍需工場の日本プレスに就職口を見つけた。そこでは、ジュラルミンの検査の仕事で月50円だつた。しかし、姉のもとにいた兄が、大阪の方が賃金が高いからここへ来るように勧めた。それで大阪の大和製鋼に勤めることになったが、そこでは配電盤の記録（1500馬力のモーターの仕事をさせる運転場）係で、月80円貰えた。従業員3500人もいて、沖縄県人は約100人ほどだった。

今泊郷友会について

大正12年に今泊の郷友会は結成されている。大正5〜6年ころから7年にかけて今泊から九州にたくさん鉄道工夫として出稼ぎにきていた。しかし、重労働だったので、西も東もわからないままに線路伝いにみな逃げだした。捕まったものもおればそのまま大阪まで出てきた者もいた。そうして今泊出身者が関西方面に14〜5名来たのである。その時の出稼ぎ者で上間サイメイという人が最近85歳の祝いをやり、1979年現在健在である。（ラサ島への出稼者で大阪へ渡ってきた諸喜田喜三郎さんが88歳の祝いの時には大阪在住の関係者を全部招待して郷友会で祝った）。

郷友会が結成された大正12年以前のエピソードが次のように言い伝えられている。大阪西成区の津守にひとりが家を借りたら、親類縁者などシマンチュ（同郷のもの）がみんなそこへ集中した。冬、夫婦が布団を敷いて寝ると、そこへみんなが足を突っ込んで寝るといった状態であった。そのような状況のある時、出稼者一人が死亡した。その当時、沖縄県人は県人同士だけの付き合いしかなく、地域社会との結びつきは全く無かったので、異郷の地における葬式の仕方も分からなかった。困ったあげく、今帰仁村出身の学校教師が三人いるということを知ったので、彼らに聞いて役所を通して火葬場にいくということも教えて貰った。教師を呼んで地域の有志たちを紹介してもらった。この死亡者がでたのを機会に、共済的なことを考えないといけないということになった。しかし、自分たちでは具体的に考えることができなかったので、また、教員

たちに依頼して規約などを考えて貰った。それで、今泊郷友会は、最初から共済事業をメインに出発した。したがって、その中身は相互扶助、仕事の斡旋、間借り先をみんなで探してあげる等々であった。当時月会費は15銭か20銭だった。また、シマ（集落）の風習で出産の時は、ユウトゥジといって一晩中飲んで祝ってあげたものである。しかし、その風習のために出産をすると経済的に困ってしまうことになった。それで郷友会が結成されてからは、お産した女性に迷惑をかけてはいけないということで、出産後一週間、男性はその家に足を入れてはいけないことを決めた。

程無く、新城安子という産婆が大阪にいたので、お産はみんなそのひとに頼むことに決めた。彼女の指導で郷友会の中で婦人部や青年部を結成しようということになった。そして、青年部では討論会、芸能大会をやろうということになり、一歩でも二歩でもヤマトゥンチュ（他府県人）に近づこう、他村のものには負けないようにしようという意気込みが生まれた。それが次第に高揚していき、野球部まで結成して、今共倶楽部という野球部を結成し、西成区を代表して大阪市大会にも出場するほど非常に強くなった。また、それだけでなく、陸上にも精を出して西成区代表に4～5名も選手を送るほどだった。こういう風に今泊共済会は、進歩の精神でずっと盛り上げてきた。

昭和5～6年頃から会員が増加したので、昭和8年に木造の今泊共済会会館を建設した。

私は、大和製鋼勤務の頃は西成区の津守に住んでいた。昭和15年には大政翼賛会が結成され、その翼賛会から今泊共済会（今共）という組織は必要ないから、解散するように命じられた。そして木造トタン葺の今泊共済会会館も売却しろと迫られた。そこで50坪の建物だったが、このままでは没収される恐れがあるということで、会員の中で購入できるものは買うようにという通知が全会員に送られてきた。そこで、4000円という大金で上間サイメイさんが購入して、木箱製作所を経営していた。現在でもメッキ工場として使用している。今泊共済会が必要な場合は、いつでも返却するという一札が入っているようだが、同郷のものだし、使用している建物を返して欲しいとは言えないし、またその必要もないので、そのままになっている。

戦後の生活と郷友会

大和製鋼では、戦後も引き続き勤務し、労働組合も結成して委員にもなり、幹部だけ週2回2時間ずつ大阪市立大学、神戸大学から講師を招いて学習会を行い、労働問題の勉強会をもった。全日本鉄鋼労働組合にも加盟していた。昭和23年、会社は労働争議したら会社を解散すると宣言したので、それでは労働組合が生産管理しようと、東京にもでかけていろいろ対策を練った。しかし、うまく行かなかったので私は会社を辞めた。退職金が11万円もあったので、それをもとにして現在の場所でラジオ店を開業した。

退職した後、昭和24年にこれまで戦時下のために休眠させられていた今泊共済会を周囲のひとたちに、あんたは組合にもいたから組織の面倒をみてくれと頼まれて、郷友会を再

建することになり、それ以来私は深いかかわりを持っている。

戦後、昭和26年3月1日、関西今泊出身者一同名義で、故郷の公民館に幕を送ったことがある。西成区の沖縄県人はよくまとまっている。二世、三世は一世の親が県人会活動に関心を持っている場合はなんとか付いてくる。だから、県人会活動は、役員が熱心であるか否かにかかっている。会長が小使いの気持ちで誠意を持ってやれば、子供たちも付いてくるのである。

長男の嫁（旧姓幸喜康子・現在金城康子）は、沖縄舞踊の大家である玉城盛義師匠最後の免状を持っている。それで大阪府や大阪市の老人ホームの慰問とか、西成区区民祭には、沖縄舞踊の出し物をだしている。金城康子の後援会長は、大阪沖縄県人会宮城会長（1979年現在）がなっている。金城康子の門下生には、西成、堺、戸の内に約60名もいる。西成区には琉球舞踊を習っているものが多く、沖縄三線を習っているものが約30名、さらに琉球民謡も習っている。

京都在住の今泊出身の玉城仙一さんが、先祖が残した伝統文化を保存しようと提案して、今泊だけの年中行事を主体にして、16ミリフィルムで撮ることにした。450万円の寄附金で撮影して、沖縄タイムスホールで上映会をもった後、今泊郷友会、京都在住者、郷里が各一本ずつフィルムを所有することにした。

昭和37（1962）年にもう共済の必要はないということで郷友会に名称を変更したが、現在、敬老会や沖縄から上阪したものの歓迎会などを行っている。また、戦後初めて沖縄に観光を組織した。さらに、昭和38年には、一世の年輩者を敬老のために大阪から東京まで飛行機に乗せ、東京の超一流のホテルに泊めた。華厳の滝、後楽園を見物させたり、夜の街の灯もみせたりしたものである。　現在、郷友会の活動の一環として、正月に生年祝をやっている。会員は、約300所帯で1000人はいるはずだが、実体はつかんでいない。会員の写真を撮影してできるだけ記録として残している。

事例5.

宮城三郎氏（明治44年生・浦添村城間出身・1979年大阪市城東区都島で聴取）

出稼動機

私は男3人、女1人の4人きょうだい中の次男で、13歳の時に沖縄をでた。

私が、出稼ぎに出たのは、東京大震災の翌年、大正13年だった。兄が中学に就学中だったので、自分も中学へ行かせてくれと、いくら頼んでも二人はとても就学させれないということだった。その時ムラから、7人が出稼ぎに出る所だったので、私は年齢は下の方だったが、私も連れて行くように頼んだ。親・親戚が名古屋にすでに出稼ぎに出ている先輩たちに便乗したのである。当時、私はムラで評判の腕白坊主だった。城間部落に「クルビ小」という所があり、そこには昔の人骨がいっぱいあった。そこから頭蓋骨をムラまで引っ張ってきて、それを枕にして寝てみせるという悪童仲間だった。父は日露戦争の生き残りだった。それで両親は、自分に難儀していたので、

沖縄を出るのに反対はしなかった。母親は泣いていたようだが、こいつはどこに行ってもやれるだろうと思っていたようである。

出稼少年

名古屋では最初は箱屋に勤めたが、私は独学で修学しようと、夜間に商工学校へ通学した。だがそこから帰校すると近所の子供たちと喧嘩にあけくれ、また、悪戯して箱を壊すものだから、私だけを辞めさせようとした。それを監督から耳にしたので、それでは自分一人辞めるといってそこを出ていったら、他の者もみんな出ていくということになってしまった。名古屋のビスケット会社には、結局2ヵ年弱勤めた。兄・操が中学生のときに沖縄から修学旅行で本土に来て、東京まで見学をしていた。それで自分より後からきて、東京行きを先越されるのが悔しくて、兄のあとを追って上京した。東京には、叔父が松阪屋に勤めていたので、叔父を頼って仕事を探した。最初はイザワ薬局に勤めたが、夜学に行かせて貰えないので、国民中学会の通信教育を受講した。その後、本郷の職業安定所に行き、夜学に行かせる職場を紹介して欲しいと頼んだ。それで、前田薬局に勤め、そこから研修学院に入学して、英語・数学を二年間勉強した。昭和3年には東京実業学校（神田小川町1丁目）に入学し、昭和7年にそこを卒業した。東京では勉強一筋だった。映画のポスターをはぎ取って、その裏紙をノート代わりに利用したり、神田の古本屋街で金を節約するために立ち読みしていた。

二度目の出稼

昭和7年には、兵役検査のため沖縄に戻った。そして熊本第六師団に入隊し、昭和9年に現役除隊となったので、熊本から東京へ戻ろうとした。だが、大阪にも知人が住んでいたので、どこへ行こうかと迷った。それで駅で帽子を投げて表がでたら東京へ、裏がでたら大阪へ向かうことにした。結局、裏がでたので大阪駅で下車した。そして、沖縄人がたくさん住んでいると聞いていた現在の大正区の千島橋の四貫島にやってきた。その付近でブラブラ歩いていたら呉屋という表札がかかった家が目に留まったので、「お宅は沖縄の人でしょう、下宿させて欲しい」といきなり入り込んだ。自分は今軍隊から戻ってきたばかりだと、事情を説明した。奥さんも顔を出して、言葉を交わしたら「良いだろう」と承諾してくれた。そこの主人は徳永ガラスという工場に勤めているということだったので、そこへ仕事を世話してほしいと頼んだ。その職場はすぐに採用してくれたので、そこに勤務しながら良い仕事を探すことにした。

まもなく、大阪造兵廠（森の宮）の採用試験があったので、そこを受験した。大阪造兵廠のユニホームである帽子は、憧れの象徴だった。そこに勤めたら将来が約束されており、生活の心配もなく、みんなが望むような勤務先だった。

野江で沖縄出身の喜瀬下宿屋に県人が20〜30人も入居していた。そこに浦添出身の友人もいたのでハガキをだして様子を聞いたら、「面白い小父さん達がたくさんいて、毎日角力を取っているよ。ここで下宿するように」と

誘われた。また、そこには、造兵廠勤務者が二人もいた。一人は造兵廠の鉄工所の工務課、もう一人は火砲の工務課に配置されているということだった。そこでかれらに会わせてくれるように頼んで、造兵廠の採用試験について尋ねた。すると、そこは300名中10名位しか通らない、難関であると教えられた。だが、その人が身元保証人になってくれたので、受験したら見事に合格できた。

そこで喜瀬下宿に移った。そこの下宿代は月15円だった。当時、日給が90銭だった。徳永ガラスでは、1日・15日の月2回が休みだったが、大きな会社では週1回の休みがとれた。私が造兵廠を狙ったのは、朝8時から夕方5時までの勤務で週1回の休みがあったので、勉強しようと思ったからである。造兵廠に勤めるようになってから、落ち着いた。私は剣道二段だったので、造兵廠では仕事をしないで、剣道を教えるのが仕事になってしまった。東京実業学校で剣道初段の資格をとっていた。

私が造兵廠に入社したのは、日華事変が発生した翌年で、枚方造兵廠を作ろうとしている時だった。私は、枚方造兵廠の移転委員で、土地の買い占めから人員の確保など、最初からその仕事にタッチすることになった。昭和13年1月に、弾丸を出荷しようとしたとき、枚方の大爆発事故が発生した。

遊郭

四貫島には、軍艦町という遊郭街が出来ていた。沖縄の辻遊郭は、人情で結ぶがここでは金で結ぶといわれていた。遊女はほとんどが沖縄女性だった。昭和10年頃花代は、1円50銭だったが、梅毒に罹った沖縄人もたくさんいた。

軍艦町というのは、料理屋の形をとった遊郭町で、呉屋下宿屋で下宿する前にその周辺をグルグル回ったら、非常に料理屋が多いと思ったが、それは遊郭だったのである。

沖縄県人の位置づけ

名古屋では沖縄県人は同化しようとする姿勢があり、真面目な人間が多かった。それで私に対しても2回も養子に入って、後を継いでくれといわれた。名古屋の日本陶器には沖縄人が数千人も就職しており、多くの人が名古屋に同化しようとしていた。そして沖縄県人同士の親しい付き合いだけでなく、名古屋の隣近所の人達とも付き合いをして、ひんしゅくを買うような習慣を剥き出しにすることがなかった。そして、大正13年に名古屋に来たときには、沖縄の人が一軒家を借りている人が多く、沖縄から出てきたばかりの人達がそこに下宿していた。そして、先住者があとから来たものに対して他府県人から笑い者にならないようにと、生活全般に関していろいろ忠告して、名古屋に同化できるように気配りしていた。

ところが、大阪は、あんまり沖縄県人が多すぎて、部落を形成していた。そして泡盛を飲んで、三線を弾いて酔っぱらったら喧嘩が絶えなかった。それで朝鮮人と同じように見られていた。とくに恩加島方面には沖縄人が固まって住んでいるので、沖縄にいるのと変わらない生活形態だったので、他府県人からみたら、異風にみえてくるようだった。

大阪では、就職試験をうけ、十分合格する自信はあっても、採用される機会は少なかった。それは、本籍が沖縄籍だったからである。それで、新聞社勤務の沖縄県人が「戸籍を移さないと、採用されないよ」と忠告されて、それで本籍を沖縄から大阪へ移した。東京・名古屋では、そのような必要性を感じなかったが、大阪にきたとたんに朝鮮人と同様に見られるようになった。沖縄のインテリ達の多くは姓や本籍を変えていった。

終戦後沖縄に引き揚げ、出生地の浦添城間で戦後復興の仕事に精を出していたが、一段落ついたので住み慣れた大阪に戻り、以後そこに定住して今日に至っている。

事例6.

仲宗根正進氏（明治45年生・今帰仁村諸志出身・1979年宝塚市高松町で聴取）

出稼前の生活苦

私は、昭和3年の暮れに大阪にきたが、男3名、女4名の7名きょうだいの次男で、沖縄での生活は大変だった。20円を親が借金したためにその利息代わりに小学校卒業後、働きに出ている。サトウキビの根を耕したり、芋を植えたり、牛の草刈りをして、その後に朝食にありついた。朝5時すぎ位から朝露に濡れた草は刈りやすいというのと、萎えないために草刈りの仕事をさせられた。田圃の中で穂を刈った後、新芽が出てくるのを刈ったりした。また、乙羽岳に薪取りにもいった。ハブに出くわして死んだものもいる。天災の多い沖縄では、蘇鉄の澱粉を食べられたら良いほうで、絞ったカスまで食べた。サトウキビが収穫期に台風でやられたり、芋は潮風にあたって枯れたり、屋根は台風で飛ばされたりして、天災の多い沖縄ではとても暮せない、なんとか安定した生活を送れないものかと、思っていた。

出稼就職

そういう折り、姉がすでに大阪天満橋の城北紡績工場で食堂の炊事係をしてそこに住んでいた。結婚して、産後の肥立ちが悪く帰省したときに、義兄も一緒に戻ってきていた。そこで姉夫婦を頼って、大阪へ出稼ぎにいくことにした。当時船賃は10円50銭だった。嘉義丸で渡航したが、沖縄から大阪まで早くて5日もかかり、時化たら一週間もかかった。最初の仕事は、大阪三国紡績（当時は豊能郡江坂・現在の江坂）に勤めた。日給60銭だったが寮では部屋代付きで4円50銭の食事代と健康保険料を出すだけだった。従業員は500名のうち30名は沖縄県人だった。同郷の私の妻も結婚前の大正14〜5年にそこの会社に就職していた。三国紡績の沖縄県人は、古宇利島出身の山川伝五郎募集人を経由して入社しているものが多かった。

田舎から都会へ憧れと金儲けのために出てきたが、田舎が恋しくてよく故郷を思っていた。だが、同郷のものが寮で一緒だし、所帯持ちは社宅に入っていたので、そのうちに気持ちも変わってきた。同郷の者同士の付き合

いは、正月を一緒に祝ったり、誕生祝いなどといったもので、とにかく働くことに精一杯だった。

激務と娯楽

家の借金を早く返そうと、朝4時に起きて、5時から仕事を開始し、午後3時に終了するが、引き続き夜11時までの昼夜勤務をよくやった。1時間は食事時間として休憩時間があったが、1ヵ月で50日分働いて、月25円は稼いだので、3ヵ月では家の借金を送金して返済した。しかし、昭和4年浜口内閣時代に金解禁で綿の輸入が困難になったので、昭和5年に操短（操業短縮）になり、深夜勤務が無くなった。

私の仕事内容は、機械のメンテナンスで食事時間で機械の運転を止めている間に歯車を変えたり、機械の手入れをした。ヘザリング、カサーという機械で、ドラフトといって、糸を通すその番（大きさ）を決めるのである。アメリカ綿、インド綿、エジプト綿、支那綿といった各種の綿があり、それによってドラフトを調整していた。それはカードという所を回ってくるので、それを操棒機にかけ、そしてリングにかけるという具合にいくつもの機械を通ってくる。番手（大きさ）には、10番とか30番とかの太さがあり、試験室でいろいろ実験していた。この仕事に慣れるために、技手が親切に勉強の仕方を教えてくれたので、帝国中学講義録を取り寄せて独習していった。昼夜勤務していても、身体を壊すかもしれないということは全く念頭にはなかった。こういう激務の中で最高の楽しみは月末に貰う給料の時だった。遊ぶこともせずに勉強に励んでいたが、リングとか各課ごとに4チームの野球チームが結成されていて、私はファーストを守っており、日曜日ごとに練習したり、会社対抗試合が年2回あった。大阪市の扇町公園で関西軟式野球大会があり、鐘紡、東洋紡績、富士紡績なども出場する試合には私らも選抜されて出たこともあった。だから、出稼労働は、私の場合は全く惨めな状態ということはなく、惨めにならないように自分から働きかければ良いと考えていた。しかし、働くことが一番楽しかった。
この三国紡績を辞める時には、日給1円20銭になっていた。

兵役後に運転手職

昭和6（1931）年満州事変の年に大阪の池田で徴兵検査をうけ、甲種合格したので長崎の大村46連隊に入隊した。爆弾三勇士（昭和7年）が九州12師団から出たころで、私は飛行隊を希望した。昭和9年に満期除隊になったが、私は紡績にいるときから、金儲けは何が一番良いかと考えていて、自動車の運転手になることだと判断していたので、軍隊に召集される前から自動車運転免許を取得するための勉強もしていた。それで、除隊になったとき大阪で運転免許を取得した。除隊後に三国紡績も行ってみたが、もう不景気の時代だったのでそこを退職して、結婚まもなく山岡組に沖縄県人が勤めていたので、その人の紹介で運転手として勤務することになった。運転手の初任給は、70円だった。山岡組が3800軒分の野田醤油

の配達を一手に引き受けていた。野田の5大醤油店として、ウシマドヤ、マルカン、白鹿のキダ、白鶴のカノウ、ヒタチボネのウシマドヤという卸店があった。昭和10年から12年まで2年間そこで働いて、給料も75円になっていたが、大阪郵便局では、給料が85円だったのでそこに転職して昭和14年まで勤めた。田舎に帰らなければならなくなったといえば、簡単に辞めることができた。大阪郵便局は、現在地と同じ場所だったので、大阪駅勤務だった。住まいは三国のほうで家賃7円という借家だったが、残業をいれると月100円の高給取りだったので家賃代はたいした金額ではなかった。大阪郵便局で、私の助手として上地というひとが採用されてきた。私が沖縄のどこ出身かと尋ねたら、私は大島ですと返答するので、「わしは、沖縄のヤンバル（山原：沖縄本島北部地方）だ、おまえは本当に大島か」と再度尋ねると、やっと沖縄だと答えた。築港で仲士をしていたが、沖縄出身の自分にだけ重い荷を担がせて苛めるので、辛抱できなくて逃げてきた。だから、大島出身と偽って名乗ったのだとのことだった。私は、自分の生まれた所は隠さずにはっきり言わないといけないと諭したこともあった。

召集後に宝塚へ

大阪郵便局も辞めて、さらに大北運輸に就職したとたんに軍隊に召集されてしまった。昭和14年3月に子供が生まれたが、4月2日生まれと届けた。その60日目に入隊することになった。ノモンハン事件にも巻き込まれ、中国大陸を転戦することになった。軍隊でも私の特技を生かして自動車の運転をしていたが、地雷に触れたり、銃弾で貫通負傷しながらも奇蹟的に生き延びてきた。

昭和17年はじめに郷里に帰省した。それまで高給取りだったので郷里に大分送金してあった。軍人恩給も支給されていて、しかも障害4級だったから月50〜60円も貰っていた。昭和17年11月から現在の宝塚市高松町に住むようになった。当時、「よんこうば」と称されていたが、武庫川河川工事の人夫募集にあたって、「よんこうば」といえば大工場の「四工場」と勘違いして応募者が多数いるだろうと考えたと言い伝えられていた。実際は、河川工事の第四工事現場のことだった。この「よんこうば」には、昭和8年位から沖縄県人が住むようになった。この地域に沖縄県人5〜6人が工事現場で働きつつ、鶏を飼ったりして生活を営むものが現れ、それが現在、高松町、美幸町に住む沖縄県人の先駆者ということになった。昭和8年に伝染病が発生したら患者を隔離する施設を建設することが必要になった。「よんこうば」付近には、良元（りょうげん）、甲東、鳴尾、武庫、川原木という村が5ヵ村あり、それが合併してその地に伝染病隔離病棟を建設することになった。そして良元村の東蔵人に住んでいた労務者は、現在の高松町に移住させられた。その後、それぞれの村が尼崎市（一村）、西宮市（三村）に吸収されていったので、良元村も宝塚市に吸収されていった。川西航空会社の寮食堂から出る残飯で沖縄県人が30軒ほど養豚業を営むようになった。

戦後の「よんこうば」と選挙

川西航空には、微用工として沖縄から青年男女が多数働いていた。敗戦によって彼らが路頭に迷うことになった。私は戦後高松で自治会長を勤めることになった。それで、2万6000坪の川西航空の用地を休閑地利用ということで、みんなに耕作させていった。川西航空の微用工達を岸和田の帝国産業に就職させたりもした。島田沖縄県知事の友人で松本カズオという警察署長と車に一緒に乗っている時、堺メリヤス会社に沖縄県人の女性が10人ほど働いていたが、会社の側の堤防で泣いていた。どうしたんやと尋ねたら、沖縄が玉砕して途方に暮れているということだった。そういうこともあって、耕作地を入手しなければならなかった。しかし、瓦礫のやまで肥料はなく、芋・野菜を植えるのには困った。そこで肥料を作るには豚を飼育すれば良いということで、豚の肥やしで芋を作り、イモズルは豚の飼料とした。宝塚市の農村企業5か年計画の中に組み込んで、現在（1979年）の宝塚市長は酪農係で私は養豚係になった。

終戦当時、宝塚のベアリング工場にも進駐軍が駐屯していた。沖縄の女性が路頭に迷っているということで、沖縄県人の有力者達がその処遇にたいして善処を求めて陳情した。アメリカ帰りの豊川忠進弁護士が中心だったが、私の名前も新聞に報道された。すると、沖縄県人の安否を気づかう手紙が1日に150通も舞い込んできた。柳ごおりの2個分も手紙が溜まったので、英語に強い豊川弁護士に依頼して、東京のマッカーサー司令部にその事情を説明したら、沖縄にその手紙全部を送ってくれたこともあった。

こういう社会的活動の結果、私は高松町と美幸町の沖縄県人票をバックに、昭和26（1951）年から5期連続宝塚市議会議員に当選してきたが、昭和46（1971）年1月21日に、日本復帰直前の沖縄に宝塚市議会議員ほぼ全員を視察に行かせて、引退した。日本復帰以前から宝塚市議会で沖縄問題を取り上げてきたし、政府に陳情もさせたりした。そして論ずるよりも沖縄を見聞して欲しいと、市長に第一陣、第二陣の視察団の予算を組ませて、30人全員を派遣した。私は最後に行ったが、その時副議長だったので、現在沖縄市の大山市長と会見していて、その時に脳卒中で倒れてしまった。私の信条は、みんなの意見を代表する発言をするようにしていることである。みんなが仲良くしていくためには、政党エゴを出したら困るということで、無所属である。高松町・美幸町からは他にも渡名喜長輝（日本共産党）、嵩原太郎（日本社会党）の3名が当選したことがある。渡名喜議員は1期落選しただけで4期当選している。嵩原議員は一期のみだった。3人で約4000票獲得したが、そのうち6～7割が沖縄県人票だった。

1979年現在の高松自治会長は沖縄県人の花城さんで、市議会議員にも立候補したが100票足らずで当選できなかった。県会議員選挙では、県人会長の上江洲久議員が社会党公認で立候補しているが、県人は郷友意識で支援してきた。

沖縄県人の町

高松町、美幸町は沖縄各地、本土各県からの寄り合いなので、当初各出身別の郷友会が結成されていたが、シマ国根性が生まれて会と会の葛藤が生まれたりして、シマ（縄張り）作りになって地域の和が作りにくくなるので、ここでは郷友会活動はやめなさいと指導した。しかし、いったん不幸な出来事が発生した場合、みんなが力を合わせていく。県人会としては、兵庫沖縄県人会高松支部として存在している。高松町全体戸数は、400戸余のうち沖縄県人は、80戸ほどである。そして、この地域での商売人は沖縄県人が多く、八百屋したりアパート経営をしたりしている。また、大阪、尼崎方面で店を持ったりしているひともいる。宝南（ほうなん）市場だけでも、店を持っているのが10軒ほどいて、豆腐屋でも3軒ある。プロパン屋、大工とか職種はさまざまである。ここでは、土地も所有して、家を建てているものが多い。

高松町自治会には自治会館も建設されている。自治会会員は180余戸で、入会していないのが過半数である。特にアパート居住者は入会していない。だが、沖縄出身者はほとんど入会している。したがって、会館使用者は、ほとんど沖縄県人で、これまで他府県人が使用したのは5～6人程度である。沖縄県人がこの地に根を下ろしたところへ他府県人が転入してきた。したがって、高松自治会館は、沖縄会館みたいなものである。そこには印刷機もゼロックスも設置してある。ここに、アパートが9軒あるが、入居者はほとんど他府県人である。そういう意味でもここは沖縄県人が作った町である。

昭和50年に宝塚沖縄芸能保存会を結成して、古典舞踊から民謡まで沖縄の芸能を保存のために活動している。宝塚歌劇とも付き合いがあり、宝塚歌劇場で上演したりしている。その活動は、単に沖縄県人内だけに止まっていないので、兵庫県知事から表彰を受けたりしている。表彰状は、次の内容になっている。「楠賞

宝塚沖縄芸能保存会殿　人間連帯の和を広げ　生き甲斐ある郷土作りに貢献された　あなたがたの功績を　讃えます

昭和53年1月13日　兵庫県知事　堺時只」

二世・三世について

二世・三世にとって自分の生まれた土地が故郷である。ここで生まれたものは宝塚が故郷である。宝塚は全国的に有名だが、宝塚のどこに住んでいるのか聞かれた場合、胸を張って応えられるような地域作りをしなければならない。二世・三世は、自分の仕事に追われているみたいで、時代とともに考えかたはなんとはなしに変わり、地域社会に関心が薄い。若者を地域に目を向け指すためには、環境整備して、人間も形成していくことを考えてバトンタッチしたい。そのために沖縄のすみずみを見学してくる予定である。

事例7.

花城清信氏（大正2年生・久米島仲里村出身・1979年大阪市大正区で聴取）

少年時代に出稼

私は、出稼ぎのために大正15年9月2日、大阪市港区石田町に着いた。男5人、女3人きょうだいで5男の私は、次男兄が久米島にはどうせ財産もないから出稼ぎに行こうと誘ってくれたのが、そのきっかけであった。次男兄は、海軍に召集されていたが満期になって帰郷してきた所だった。その頃、従兄弟などもブラジルへ移民として出ていったばかりだった。私は、まだ13歳で在学中だったので、大阪で仕事しながら通学するつもりだった。しかし、大阪に着いたら大阪弁でないとどこに行っても通用しないので、嫌になってしまい、もう丁稚奉公することにした。最初は個人経営の鉄工所に勤めたがまもなくつぶれてしまった。それで12月31日に大正区へ引っ越しした。港区石田町では、石炭仲間（仲士）の担ぎ屋の仕事しかなかった。非常に力持ちの従兄がそこでまず落ち着いていたのである。次男兄は、大阪1～2位を争う大きな鋳物会社に勤めていた。そこでは、高さ5尺4寸、目方16貫以上ある重さの物を両手で抱えて、何メートル以上か歩けないと採用しないという厳しい会社だった。そのかわり、普通の人が月50円の給料のとき、120～130円も支給していた。沖縄の体格の良い退役軍人の場合、ヒキがあれば入社できた。

その頃、沖縄からの出稼者は、製材関係にだいぶ勤めていたが、そこでは技術職ではなく製品の担ぎ屋として、製材所内から外に担ぎだす仕事だった。他府県から材木が船で搬入されてくるので、担ぎこんだり、石炭運びなどをする作業員を「仲間」と呼んでいた。それは、普通日給1円から1円50銭のとき、日給4円から5円の高賃金だった。それは昭和5～6年（1930～1931年）の不況時の賃金だった。

職業歴と軍務歴

妻の従兄弟が昭和6年6月頃に兵隊検査をおえて、上阪してきたが何ヵ月も仕事が見つからない位不景気だった。毎日弁当を持って仕事探しに行くが、2人募集があってもちょっとでも遅かったらまったく入れない状態だった。12月一杯ブラブラしていたが、妻のまたいとこが西成区で散髪屋をしていたので、そこに居候させてもらった。オヒツにご飯を入れて出しても、みんなが居ないときに食べるというほど気兼ねしていた。

私は鉄工所が倒産したので、餅屋に勤めたがそこは性に合わなかったので、また、別の鉄工所に勤め口を見つけた。そこでは日給65銭からスタートした。下宿代が月14円の時だった。私は兄と同居していたのでなんとか食えた。それから、また滝川製作所に転職したが、そこは平和産業で紡績の綿をほどく部品作りで、

日給65銭からスタートして、辞めるときには1円85銭になった。

兵役

昭和8年には兵隊検査のために沖縄へ帰郷することになった。沖縄で6か月滞在したのち昭和9年1月には久留米の部隊へ現役入隊して、昭和10年には満期除隊となったが、昭和13年に再度召集され、15年に除隊となった。しかし、昭和16年にまた召集され、19年まで満州にいた。あしかけ8年間も軍隊生活を送ることになったのである。

昭和10年の暮れ、除隊となったので昭和11年に大阪大正区北恩加島で結婚した。妻は、昭和2年16歳の時、久米島から群馬県の二十丸製糸工場に女工として出稼ぎにきた。約20名ほど久米島出身者がいた。紡績会社は、小遣いも渡してくれたうえに12月に親元へ送金していた。それでこの会社が久米島では評判になった。それまで紡績に女子が行くといったら部落では笑い者になったが、しっかりした会社だということでどんどんこの会社に出稼ぎにきた。昭和2年から5年まで群馬にいたが、いとこが大阪市西成区にいたので転職してきたという。

私は、結婚の5か年計画をたてて、資金を貯めようとしたが、急性肺炎にかかって死にかかったとき、彼女の世話になり、婚期を逸させてもいけないということで結婚した。私は、昭和19年12月26日、長期軍務者ということで除隊になり、やっと妻子のもとに落ち着くことができた。しかし、戦況は悪化しており、昭和20年3月13日の大阪空襲で焼け出されてしまったので、南河内郡に民家を借りて、妻と娘を疎開させ、せめて二人はなんとか助けたいとおもった。

馬車引き

私は、甥が騎兵隊の経験者で馬の扱いに慣れているということで、馬車引きをしており、それが儲かるという話だったので、戦時中から私も見よう見真似で馬車引きを始めた。終戦翌年の昭和21年11月3日に、大正区に引っ越してきた。そして、馬2頭手に入れて、ひとも雇って馬車引きの仕事を引き続き行った。ほとんど薪類の販売だった。製材所から廃材を購入して、市内に売りに行ったが、当時は統制経済下でその行為でも闇取引になり、取り締まりが厳しかった。それで早朝の暗いうちから、取り締まりの手薄そうな場所を選んで、15キロから20キロ位売り歩いた。夜が明けない内に目的地に着いたら、もうそこには買い手が待っていた。バラで積んだ荷を2千円とか3千円とかで売りさばいた。夜の明けない早朝に出ても夜9時頃にしか家に帰れなかった。この薪販売業は、7～8年も続いた。昭和28年から小林町で雑貨店の経営を始めて今日に至っているが、店がとてもはやって馬車引きの仕事まで手が回らなくなり、馬を売却することにした。

小林町には沖縄県人が100所帯ほど住ん

でいた。特に鉄商売で成功しているひとが多い。鉄商売とは、鉄工所で鉄製品を作った切れっ端とか、鉄屑や旋盤屑を買ってきて、それをまた中山製鋼などの大工場に売るのである。廃品を溶かして、新製品に仕上げていった。

郷友会との関わり

私が上阪した当初は、県人同士の付き合いはとても深かった。沖縄角力大会でも年に5～6場所もあったし、模合もよくやっていたし、沖縄芝居も大阪でやっていた。昨年（1978年）から西成区の県人会で沖縄角力をやるようになったが、昨今は県人会の催しとしての沖縄角力でも久米島出身者が音頭を取らないかぎり行われなくなった。戦前は、大正区、西成区、堺、モスリン橋（戸の内＝兵庫県尼崎市）の5～6か所で沖縄角力大会がもたれて一場所で約4000人ほどの県出身者の見物人が集まってきた。

しかし、角力大会を持つにも経費が相当かかる。昨年の場合、経費をまかなうために150万円寄附金を集める予定だったが、90万円しか集まらなかった。それで毎年実施することはほとんど不可能である。おまけに選手が怪我した例もあり、主催者側としてはどうしても躊躇せざるを得ない面がある。

久米島出身は、芝居サー（芸能人・玄人）に負けないほどの芸達者が多く、仕事の合間に夜、芝居や踊りに稽古に励んでいた。
昭和2（1927）年、久米島郷友会が発足したとき、数ヵ月前から唄と踊りの練習をして、発足総会のお祝いの出し物にした。初代会長は私の兄の花城清吉だった。当時、大正区に久米島出身は約100名ほどいた。踊りは、コティ節、チジューヤー、カナーヨー、高平万才などだった。

その頃、金城ナンポウというひとが沖縄から演劇団を関西に引き連れてきていた。それで、映画館の市岡シネマを借り切って、沖縄芝居をずっと興行したこともあった。だから、沖縄演劇の大御所の大宜見小太郎、真喜志康忠さんなんかも大阪に一時住みついていた。当時は出稼者は、帰省もままならなかったので沖縄が恋しくて、娯楽も少なかったので大変賑わっていた。

戦前は、兵庫あたりからもシマンチュ（同郷の者）が、上阪してきたことがわかると日曜日などにすぐ飛んで行ったり、訪ねてきたりしたものである。しかし、今は不幸が起きた場合は別だが、当時のような行き来はまったくといって良いほどなくなった。

当時は模合も盛んに行われていたが、不納して夜逃げするものもいたり、また経済的にも落ち着いてきたので、今では親睦模合程度を久米島出身者中心に20～30人で行っている。

郷里意識と郷友会の行く末

私は生まれ島久米島で余生を送りたいと願っている。妻の兄が大きな屋敷を持っているので、シマに戻ってきても良いと言っているが、妻が16歳の時から本土暮らしなので、シマは逆に余所みたいな感じだという。大阪で余生を送ったほうがよいというので郷里への気持ちが異なっている。自分の同年輩は知り合いがいても、年下になるとまったく知らないの

で、知人の多い大阪がよく、たまに郷里へ帰省してもすぐ大阪に戻りたくなるといっている。とくにきょうだいが健在のうちは帰省もするが、いなくなったら帰郷もしなくなるのでないかと言っている。二世の子供でも甲子園野球で沖縄チームを応援しないものも出てきた。子供に沖縄は知らないと言われたら、結局しかたがない。したがって、郷友会などもいずれはなくなる運命だ。それも時代の流れだから止むを得ない。

事例8.

上原新太郎氏（昭和2年生・那覇市当間出身二世・1980年伊丹市西野で聴取）

二世の生い立ち

両親は父が小禄村（現在那覇市）字当間出身（現在は自衛隊基地内）で、母が本部村（現在は町）浦崎の出身だった。私は昭和2（1927）年2月24日に大阪で生まれたので、沖縄二世である。

母は、戦時中の昭和18年12月22日、湖南丸で里帰りの途中、アメリカの潜水艦攻撃を受けて弟と一緒に戦没してしまった。その時、私は高等小学校を出て大阪の税関で給仕として仕事に就いていた。私は、いつ来るかと港に母達を出迎えに3日間ほど連日通っていた。大勢の出迎え人が詰めていたが、父が築港の大黒屋旅館で船員から波の静かな月夜の深夜に魚雷でやられたらしいという情報を入手してきた。父が出迎え人にそのことを伝えたら、みんな泣き出した。私も目の前が真っ暗な気分になった。母と一緒だった弟は、年が明けたら国民学校に入学する予定だった。大阪で待っている子どもたちに沖縄からのお土産を持ちかえって正月を迎えようという矢先の災難だった。

父が大阪に出稼ぎにきたのは、大正末ごろだった。まず、沖仲士をしたり、化学会社の窯炊きなどに就いて昼も夜も稼いでいた。母は紡績女工をしていた。両親の結婚は沖縄でやったか定かではないが、大正区北恩加島で肉屋を始めたのは、私が小学校へ就学した頃だった。父は太郎という名前で、当時は肉屋の上原といえば、町の大概のひとが知っていた。日曜もなく朝早くから夜遅くまで商売しており、休みは元旦だけで2日目からはすき焼き用の肉を買いに客がきた。私は昭和9年に北恩加島尋常高等小学校に入学した。兄弟が多かったので、おむつを干したり肉の包装用の古新聞を4つに切る仕事などの手伝いをしていた。当時、北恩加島尋常高等小学校の大半が沖縄県人の子弟だった。

二世の沖縄意識

大阪市大正区の北恩加島で生まれ育っていると、周囲は殆ど沖縄出身者なので、沖縄の人間ということを意識させるような沖縄を差別したようなものはなかった。しかし、「半島人、琉球人お断わり」という下宿屋の看板をみたような記憶もある。

肉屋をしていた北恩加島は、通称万歳橋という大通りでメインストリートだった。そこはコンクリート道路で、労働者街の商店が並んでいたが、肉屋は私達一軒だった。横道に入ると二階建ての長屋があり、南西の外れに

「クブングゥー（窪地の意味）」という低地帯にバラック屋が50〜60軒も建っていた。三線の音が下宿屋かバラック屋から聞こえてきた。私らが住んでいたのは商店街で、その裏が普通の長屋で借家が並んでいた。

沖縄出身者が住んでいたのはその辺りだったが、内地人（他府県の意味）も住んでいた。50軒位のクブングゥー住人は、ほとんど沖縄県人で、沖縄部落と言われていたが沖縄部落のシンボル的な存在とはいえなかった。周辺からは、「ろくじょう」とも呼ばれていたが、それは六畳一間の狭い家だったからそのような言い回しになったと思う。（その位置は、現在の小林町にいく手前）。北恩加島も半分は大阪湾の改修で埋め立てられ、地上げされたので、千島町にだいぶ転住している。北恩加島は、沖縄出身者が一番多いはずである。

私は、大阪生まれだが、両親が家のなかではウチナー口（沖縄方言）を使用しており、食事も内地人とは異なり、シブイ（冬瓜）とか豚骨、昆布、大根などの炊いた沖縄式の料理が嫌になるほど多かった。だから、たまに内地人（ナイチャーと呼んでいた）の家で、味噌汁とかソウメン汁をごちそうになったら、あっさりしていて美味しいと思った。それで父は、子どものころは芋しか食べていないので、「お前らはぜいたくでボンボンだ」とぼやいていた。それから、沖縄式のトートーメ（位牌・仏壇）もあり、紙銭を焼いたり、沖縄式の料理で重箱に詰め、沖縄の年中行事の清明祭（シーミー）も大阪で行っていた。

父は、三線を持っていなかったが、沖仲仕や土方作業が雨で休みになったりしたら、各所から三線の音色が聞こえてきた。だから、大阪にいるが、沖縄の島をそっくりそのまま持ってきたといってもいいくらいだった。しかし、内地人の友人の家が豆腐屋をしていたが、おやつの時間も決まっていて、一銭玉を親が子どもにあげるし、家のなかはきちんと片付いていて、勉強机もあるので、ナイチャーはいいなと僻んでいた。私は参考書や勉強机もないし、一銭くれと母親にねだるとゲンコツされた。遠足、正月、運動会位にキャラメルをくれる位で、金はあったとおもうが使わないで貯めていたようだ。

私は尋常高等小学校の高等科を出たが、商売人の子どもだったし、中学校に進学することはなかった。しかし、昭和６年生まれの４歳年下の弟は出来がよく、学校で褒美を貰ってくると母親がとても喜んで、天麩羅をあげて近所に自慢して配っていた。それで私はひねくれて中学に進学したかったが、行かないといった。小学校時代に室戸台風があり、二階の天井にまで浸水して人馬が流されるのを目撃した記憶もある。

就職後の沖縄意識

私は高等科を卒業後昼は税関で給仕して、昭和17年夜間の港区市立市岡商業学校に進学した。税関に入る時、会計課長が試験していた。学校の通知簿をみて、「お前沖縄出身だのに良く出来るんだね」といい、部屋の時計を指さして「あの時計いま何時か」といった幼稚な質問をするので、沖縄人を馬鹿にしていると思って腹が立った。そういう出来事はいつまでも忘れられない。夜間でも商業学校

を卒業したら、「雇い」になって、試験なしの判任官待遇になれるという話しを聞いていたので、就学することにした。給仕の給料は、日給月給制で日給60銭・月約18円ほどだった。給仕仲間が集まると、うちの村ではこういう祭りがあるとかという話題になると、私は郷土のことを知らないから話が出来ずにその場から逃げだし、そういう時は沖縄出身ということがとても恥ずかしかった。

北恩加島では、少年時代に地蔵盆とか夏祭などで神輿なんかもあったが、その祭りには沖縄出身者はあまり参加している様子もなく、自分の故郷の行事も知らなかった。それから給仕仲間に沖縄出身ということで引け目を感じるようになり、仲間外れにされていくというか、こちらが避けるようになったのか、とにかく溝が出来ていった気がした。

徴用工

軍需工場に給仕仲間から私一人が徴用工としていくことになった。しかし、学校から在学証明書を貰ってきたら、その徴用は延期された。沖縄出身の松島という人にも徴用がきたが、内地人の守衛仲間から日頃低く見られていたので、「沖縄県人を馬鹿にして自分に徴用がきたのだ」と泣いて怒っていた。しかし、後からは自分たちだけでなく、全部の男子が徴用にとられた。私は長谷川鉄工所という小さな町工場に回されたが、海軍指定の軍需工場として爆弾の発火装置の製造をしていた。海軍士官が監督に来ていて、夜になると牛肉をたらふく食べて、ビールを飲んだりしているのに、こっちは給食券を貰って、オジヤしか食べていないうえに徹夜作業で腹ぺこだったので工員全員が腹を立てていた。それで、不合格品を沢山だすようにして抵抗して、憂さ晴らしをしていた。おんぼろの工場が軍需景気でたちまち大きくきれいな工場を増設していった。

沖縄県人の沖縄文化との関わり

子供達でも結婚式やお祝いの席では、三線が鳴ったらどう踊ったらよいか分からないなりに、沖縄踊り（カチャーシー）などを踊っている。足ティビチ（豚足）でも慣れて、食するようになった。沖縄人でもナイチャーフージー（他府県人のふりをすること）して、家でも沖縄方言を使わないようにするとか、苗字を変えたりするひとがいた。しかし、旧姓を知っている人は、旧姓で呼ぶのでしこりが残るようで、また元に戻したりするひともいた。

統制経済下に入り、家業の肉も配給制度になり、50匁、100匁と仕分けして持ってくるので、1時間ほどでは売れてしまい、そのうちその配給も無くなってしまった。それで肉屋が集まって協同組合を結成し、父はそこに勤務するようになったが、機械で指を切ってしまい、それで辞めてしまった。

兵隊検査

徴兵検査もうけた。遺言書と髪の毛や爪を切って、それを奉公袋にいれることになっていた。ほとんどが甲種合格だった。その検査の時、沖縄からきた県人も検査を受けていたが、言葉がはっきりしなかったので名前を呼

ばれても返事しなかった。それでみんなの前で殴られていたのも、ナイチャーに腹がたった事柄のひとつである。もうその頃は、障害者でないかぎり甲種合格だったので、その合格を喜ぶような感じではなかった。戦争は負けているから士気があがらない暗い雰囲気だった。学校では予科練と満蒙開拓の義勇隊を募集していた。勉強のできないものが、派手な歓送会に憧れて応募していた。

普通の中等学校は5年制だったが、夜間は4年制だった。入学当初から負け戦を噂していたが、教師は士気高揚のために、連合艦隊は健在で、魚雷攻撃を受けてもその穴を埋める特殊なゴムが発明されているから、軍艦にはそれがあるので大丈夫だと真面目くさって話していた。しかし、教官が教室を出たら、生徒たちはまた「連合艦隊が琵琶湖で待機しているらしいぞ」と茶化して、みんながドーッと笑ってしまうという雰囲気だった。

大阪での空襲体験

私は商業学校だったが、一年後には工業学校に変わった。それで製図引きなどが増え学校が嫌になった。しかも軍事教練の時間には近所の酒屋の主人が軍事教官として少尉の権限を振っていた。それで英語教師が小さくなって、軍事教練の時間はどんどん増えていった。銃剣術の時間でも非常に腹が立っていたので、教官が構えと言った途端に突いたら、教官が倒れてしまったが、怒らなくて「よくやった」とやせ我慢していたこともあった。

婦人会に竹槍訓練を指導していたが、3～4日もするとあほらしくなり、伊丹に逃げて行った。消火訓練も効果が薄いとおもって馬鹿らしかった。

徴用工として通っていた長谷川鉄工所は、4月頃に爆撃を受けてやられてしまったので、そこにも行かなくなった。

昭和20年に縁があって我が家に居候していた船員がいて、その人と一緒に疎開先でバラック屋を建てた。父は馬車を3台も購入して、人を雇って運送業をやりだした。当時すでに馬も登録制で良馬は軍馬として軍に徴発されていた。父は、疎開者の資材や運送業務を戦中に開始したのである。大阪空襲に会ったとき、私は学校に行っていた。空襲が開始されるや渡し船に乗って家まで駆け足で戻ったが、すでに家が燃えていて、近所の炎をあげている家に水をかけていたみんなが一生懸命に消火に努めていた。私はもう父達が死んでしまったと思っていた。すると父や継母や妹が煤で真っ黒になって広場に固まって生存していたので安心した。その時は、米軍機のB29が焼夷弾を投下して、そして人が一か所に集まってきたら、そこへ小型爆弾を投下するので被弾死者が続出した。だから死体が一杯だったが、気が立っていて異常な状態だったのか、何とも感じなかった。手足が焼けて真っ黒になっていて、ちょうど山羊が焼き殺されているみたいだった。また、焼夷弾の直撃を受けてそれが突き刺さって即死している人なんかも歩道一杯だったのを記憶している。みんな防空壕を掘ってそこに家財道具をしまってあるので盗まれないように青年を集めて夜警を立てていた。

疎開と伊丹市での空襲体験

私は、大阪が焼夷弾攻撃を受ける前に兵庫県の武庫川の避難小屋に疎開していた。そこには沖縄県人と朝鮮人が住んでいた。元々堤防の改修工事現場でその飯場後だった。河川敷の公有水域を畑にしていたので、そこでは父が同年輩の長浜という知人の畑を借りていた。昭和20年2月頃だったので、そこに疎開してきたのは私達が一番早かった。

その頃から大阪市内では疎開を促進していた。そして火災が広がらないために、密集地域の住宅を間引きするよう命令がでていた。それでロープで家を引き倒して、その材木を馬車に積んで疎開先に持っていった。

大阪空襲を受けたあと伊丹市に避難した。その場所は伊丹市西野字上川原と勝手に称するようになった。そこには50〜60軒の農家しかなく、伊丹市の一番の西端で狐もでるといわれているほど寒村だった。川向こうの仁川に川西航空機製造工場があったのでB29爆撃機の攻撃にさらされて、大変恐ろしかった。武庫川の堰堤が上空からはトーチカにみえて攻撃されたのか知らないが、家が吹き飛ばされてしまい10人位が即死した。私が防空壕に入っている真ん中に弾が落ちて、私と同年位の仲村という人が一緒に入口の方にいたが、その人が破片で即死するし、朝鮮人が一人首を切られて血だるまになっていた。その他、みんな押しつぶされたが生命に別状はなかった。

そこにはちゃちな防空壕しか作ってなかったので、慌てて堤防を越えて昆陽川の中に逃げ込んだが、爆風で石がどんどん落下してきた。爆風で家だけでなく、芋のカズラも吹き飛ばされて芋づるだけ残っている有り様だった。着物は穴ぼこだらけになり、畳も駄目になり家は全滅状態だった。夕立が降るようなザーッという音がすると喉がカラカラになって、ドカンという音がした。そのあと、なんとも無かったら生きているなとホッとしたものである。グラマン機の攻撃で6人位が死んだ。川西航空機の女工さんでウチナーンチュも逃げてきたが、どうなったかわからない。川のなかで「親父大丈夫か」と尋ねるだけでも、「敵に聞こえる」といって怒られるほど緊迫していた。それから東側に避難して、住友電工の手前の中野は植木の産地だったので、植木林のなかの他人の防空壕へ避難した。

しかし、西宮、尼崎、堺市などが空襲を受けているころは、花火大会を見物するみたいに防空壕にも入らずにその様子を眺めていた。

「終戦」

伊丹市西野地区にも米軍機から宣伝ビラが投下された。天皇が人力車夫になって、マッカーサーがその人力車に乗っている漫画のビラと広島に新型爆弾が投下され、これ以上抵抗しても無駄だから降伏しなさいというビラだった。新型爆弾ではえらいことになったと、自分たちだけでも生き残らないといけないと思って、甲山の裏に避難した。橋の下で水が流れていない部分に村人が床を敷いて避難場所にしていた。田舎の山中には空襲がなかったのでそこで寝泊まりした。そして農業会の倉庫があり、戸を開けてみると麦が一杯積まれていたので食べ放題だった。米を少し持っ

ていたからそれに混ぜて炊いて、飢えをしのいでいた。米が底をついた時、次男弟と一緒に米をとりに戻ったら、戦争は2日前に終わっているという情報に接し、大変嬉しくなった。安心してゆっくり寝て、翌朝父たちを迎えに行った。終戦の知らせを受けたとき、私は本を読むのが好きだったので、夜、灯火管制や警戒警報があると防空壕に入らないといけないので、明かりを取り戻せたことや不安感がなくなったのでやれやれという思いで嬉しくなった。

川原で牛馬の密殺生活

川原での生活は、牛や馬を購入してきて、それを殺して肉を売って生活していた。川原には電気もなく、密殺していたから今から考えるとゾッとする。堤防で牛の鼻ずらを捕まえて、父が斧の刃の逆の部分で眉間を一撃すると脳震盪を起こして倒れてしまうので、素早く頸動脈をきって、捌いていくのである。砂の上で皮を剥いでいくが、ロウソクの明かりを頼りにして行っていた。父は、肉屋をしていたので屠殺が上手だった。素人が馬などを購入してきて、密殺しようとして殺し損ねたら馬が死に物狂いで暴れまわって、バラック家をバラバラにして逃げだす場合もあった。その密殺した肉は、大阪市内に密売にいき、牛や馬は馬喰（仲買人）が三田方面から入手してきたものを持ち込んできた。父は、玄人だから20〜30頭位は密殺したはずである。牛馬の骨と皮は、穴を掘って埋めていたが、数年後、皮が金になるという噂がたち、みんなその埋めた皮を掘り出したが、皮はズルズルに腐っていた。骨を炊いて脂で石鹸作ったり、骨粉は、肥料としてそれを販売するひとも現れた。すると、他の人も見よう見真似で、瞬く間にその業者が増えていった。

私等は戦前、大阪の布施・河内で養豚もやっていた。人を雇って残飯を集めたり、密殺した肉を肉屋に持っていったり、自分の店で売ったりしていた。

川原で牛馬の密殺生活は、１〜２年ほど続いたと思う。それからみんなは養豚業をやりはじめた。馬喰がいる間は、密殺業をやっていたが、その人が沖縄に引き揚げたらその仕事は無くなったのである。昭和21年位から沖縄への引揚が開始されたので、川原の沖縄集落は、47軒に減った。

密殺が盛んだった沖縄集落には他部落の人達が怖がって寄りつきもしなかった。戦後農家の牛馬がよく盗まれる事件が発生したが、沖縄部落のものが盗んでいるのでないかと、疑われていたが、実際はみんな馬喰から購入して密殺していたのである。

私は、昭和22年頃近くの変電所が拡張工事をしたので、そこに金城三郎というひとが下請け工事をやっていたので、その人の下で仕事についた。

宝塚市の安倉の駐在員が消防自動車に乗って、消防団と私たちの部落に押しかけてきたことがある。牛が盗まれたということで、土足で上がり込んできて、鍋の蓋を開けたりしていた。私らは変電所の工事現場に行っていた。それで指笛を吹いて消防団員を捕まえようと追いかけ、石などを投げたりした。消防団員は逃げてしまったが、駐在巡査を捕まえ

て、沖縄人連盟の役員の安里昌永というひとの家に引っ張りこんで詰問した。「ここには県人会の組織があるし、牛馬を盗んだりした覚えはないのに何故土足で無断であがり、鍋をあけたりして、沖縄人を馬鹿にするにも程々にしろ」、と言った。そうしたら、安倉の区長が酒二升と醤油やにわとり４～５羽持って謝りにきた。そして一緒に飲み食いして仲良くなった。

もう一度は、尼崎の常吉部落の住民が消防車で押しかけてきたが、その時は警察官がピストルまで所持していた。消防団は10人位いたが、また変電所の工事現場から指笛を吹いて14～５人位がみんなを取り囲んだら、あの時もみんな逃げだしていった。それは、ここで密殺していたので、牛馬が盗まれたら証拠もないのに噂だけで川原の沖縄人を疑ったようだ。疑惑があるのなら、みんなの立会いの下で家宅捜索するのであればまだしも、留守のあいだに土足で上がり込むとは馬鹿にするにもほどがあると怒ったのである。みんなの家は、古い材料でルンペン小屋みたいだった。そこで、牛馬を屠殺するような連中が集団で彼らを取り囲んだということで怖がって逃げだしたようである。

大きい事件としては、当銘清市事件が発生した。私より年長の青年が、西野村で野菜泥棒と部落の人にいわれたことに腹を立てて、アルコールを飲んで10数軒の農家の家に棒を持って押しかけ、暴れまわったので村中の人達は怖がって竹藪の中に逃げ込んだ。警官が駆けつけてきたが、棒で突き回って、雨戸を破ったり、よくもこんなに暴れたと思うくらいの被害がでた。ところが、逮捕されて数日後に重態といって送り返されたが、もうその時は虫の息だった。妻と幼児一人がいたが、警官は慌てて戻っていったが、それから大問題になった。妻が面会に行ったときは元気だったのに、警察から死んで帰えされた時は黒あざだらけだった。警察はメチルアルコールのせいだという説明だった。それで、沖縄人連盟の関西本部を動員して、伊丹警察署に抗議に押しかけた。150人位が警察署を取り囲んだら、二階に数人を残して全員が逃げだしてしまった。空港から米軍のＭＰ（憲兵）がピストルを持って駆けつけてきたが、英語がまったく通じず、皆ひきあげてしまった。茶毘に付す前に、警察医が解剖するというので、墓場で解剖した。それに立ち会ったが、肝臓がメチルアルコールでどうのこうのと説明していたが、住民側立会いの医者はいなかったので、うやむやになってしまった。しかし、死亡した当銘さんは川原部落に住んでいたが、葬式は西野部落の集会場広場で執行して、沖縄人を馬鹿にしていると気勢をあげたものである。

河川敷で養豚業生活

沖縄人と隣接して住んでいた朝鮮人が引き揚げ始めたので、私達一家は川原の朝鮮人の家を買い上げて、養豚業を広げていった。部落では私達が一番規模が大きかった。父と私達兄弟は、アメリカ軍の飛行場から残飯を運んできた。当時は、どこの会社でも食事が少ないから残飯が少なかった。それで自分の畠の芋を飼料にして、約150頭ほどの養豚業を営み、伊丹で一番大きい規模になった。父は動

物好きだったので、豚以外にも山羊・兎・鶏・牛・馬・アヒル・チャボ・七面鳥・羊まで飼育して、まるで動物園みたいだった。羊の毛は加工に出してシャツを編んだ。私らは山羊の乳をしぼって毎日飲んでいた。また病院から兎を買いにきたり、卵は関西電力会社の社宅の人達が買いにきた。

飼育の規模が大きくなり、自動車で残飯回収をしないととても間に合わなくなってきた。それで昭和27（1952）年には、自動車の運転免許を取り、関西電力の変電所の三輪車を払い下げてもらい、それで残飯を回収して回った。当時としてそれが珍しい存在で周辺から見物人がやってくるほどだった。

尼崎市の守部部落には朝鮮人が数多く住んでおり、闇の焼酎を造っていたので、その酒粕を譲ってもらって、飼料にしていた。当時は、沖縄人は呑気なもので豚を養いながらも酒を飲んだり食事をしていた。そして手が空いた時には、田植えや稲刈りの手伝いをして、小遣い稼ぎをしていた。

宝塚市の邸宅がアメリカ進駐軍に接収されていたので、そこからアメリカ人が丸焼き用に適当な中豚をよく買いにきた。

河川敷の土地は、使い放題だった。それで高松町の沖縄出身者らが耕作していた土地の権利を買ったりして、土地をどんどん増やしていった。義母は、商売が好きだったので、進駐軍から出る残飯の中から食べられそうなものを選びだして、それをまた行商して売りに行ったが、飢えの時代だったので良く売れていた。沖縄への引揚が開始された時、川原の沖縄人も約半分ほどは帰郷していった。それで私ら沖縄人連盟の役員は、広島県の大竹、似島の収容所まで見送りにいき、世話してあげた。